

いづみのほとり

末永雪の思ひ出



目次に代えて

「泉の辺ほり」について

主はわたしの牧者であって、
わたしには乏しいことがない、
主はわたしを緑の牧場に伏させ
いこいのみぎわに伴われる。

(詩廿三ノ一―二)

おおよそ主にたより

主を頼みとする人はさいわいである。

彼は水のほとりに植えた木のようで、

その根を川にのぼし、

暑さにあっても恐れることはない。

その葉は常に青く、

ひてりの年にも憂えることなく、

絶えず実を結ぶ

(エレミヤ十七ノ七一八)

嵐の吹きすさぶ日も、霞たなびく春の日も、炎熱に焼ける夏の日も、昼となく夜となく、泉の底では清水がこんこんと湧き溢れております。泉の周辺には草も木も生ひ繁り炎暑の季節にも、激しい嵐の中で揉まれながらも生き生きと成長して居ります。

主イエスの恵みは清水が湧き溢れてすべての生き物をうるおす様に、私共に無限に与えられて居ります。故人の生涯は泉の辺に生えた木が、その根を泉の中を下して無限に湧き出る水を吸うて生ひ育っている様に恵みの泉であり、生ける水

の源である主イエスに生涯の根を下して、その無限な恩寵に生ひ育ち、焼けつく様な試練の中にも、吹き荒れる嵐に枝も折れ、葉も千切れる様な時も、絶えず主の恩寵に慰められ、癒され、力を与えられて、主の栄光を望んで成長をつづけて居られました。

泉のほとりに生い茂った木陰は旅人のいこいの場となり、その枝には空の鳥が喜んで巣をかけおだやかな生活を営み、木の実は鳥や動物や人の食物となり、生命を豊かにする様に、故人は常に祈りのうちに活ける水の源なる主との深い交りのうちに歩んで居られました。人生の旅路に疲れた多くの方々には故人を訪ねて主に在る慰めを与えられ、家族をはじめ親戚知人からも何かと祈りを求められ、その要めに応えて忠実に祈り、めぐみの聖詞を以って励まされました。

泉のほとりの草むらの中に、誰にも知られないまゝ、香り高く咲き出た白百合（故人の愛した花）を見出した旅人はどんなに驚きと喜びと慰めを与えられたかわかりません。主との深い交りの中にひたすらに己を空しうして聖霊による喜びを以って事毎に感謝し、主を崇めて居らした姿は私共に何が美しいものであり、

香り高い貴い人生とはどういふものかと知らせて下さいました。

いこいの水際（みぎわ）に導かれた小羊の様な、泉のほとりに生ひ育った木の様に又泉のほとりの白百合の様な故人の思い出でございませうので「泉の辺」と書名を扱ひました。

「泉の辺」は故人の思い出の泉でございませうので特に目次を作りませず、皆様が一篇一篇を御読み下さる楽しみが多くなりませう様に願ひて居ります。「泉の辺」が皆様を生ける水の源、恵みの泉への御案内に幾分でも御役に立ちますなら故人はどんなにか喜ばれることと思ひます。

（榎本利三郎）

常に喜べ、絶えず折れ、凡てのこと感謝せよ。これキリストイエ
スに由りて、神の汝らに求め給ふ所なり

(テサロニケ前書五章十六―十八)

私は数十年来主に在りて福岡の御宅に伺い、又京都に於いても主の御愛の内に御交りの時を与えられ、又夏の御殿場の集會に御遠方から必ず御出席なされ、幸な時を主の前に与えられて教えられ又数年前の御病氣の時から、毎日午後十時を期して主の御前に御祈りささげる御約束を致して遂に御昇天迄祈りつつきました。之れ皆主の御導きと信じて喜び申します。

偕て前の聖句は御老人様の常に深く味わい居られた御言葉と私が信じて居ります。此の御言葉はペンテコステの内部の御働と承り私も大いに教えられました。御老人様の内の靈の御働きと存じます。

第一 常に喜べ

御老人様の御在世中の数々の事がらによつても、特に御主人様の御在世中に於ける御様子を拝しても、あの大家を治めて居らるゝ時も、多くの方々との御交りの時も、常に喜びあふれて居られた御事、之皆御内住の靈の御働と信じ主を崇め申します。

第二 絶えず祈れ

実に祈りの御器と申上げる事にて、先に福岡には数人御婦人の祈りの器が在りて、二日市の九州聖会の火の基とは此の祈りより起りたる事と信じ其の祈りの御器の一人にて、御大家の主婦として一切の事を祈りてなされつゝ、又祈りについて大いに教えられなされし事も存じ上げます、又祈りの大切なる事の二三を申上げます。

1. 王なる神を崇めて明白に言い表わして祈る。
2. 我が思に御心をとめ給え。
3. 我がさけびの声をきき給え。

以上は詩の五篇より御老人様の内の祈の靈の御業にて其の爲めに御老人の御顔のかゝやきを拝しました之れ祈りの御器たる事なり。

第三 凡てのこと感謝せよ

之れ又大切なる事にて、私は度々御老人様より承りました、之は御内住の聖靈の御示しと信じます。何故かと申せばロマ書八章二八節に神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の爲には、凡ての事相働きて益となるを我らは知る此の聖言は実に深き味もあり又現実ともなり、更に神様の御目的は御子の像に象らせんと定め給えりと御老人様と深く味わいて主を崇めた事も御座います。

私は此れ等の事を思い起して書いて居る時も、更に新らしく教えられて大いに喜んで居ります。やがて御国で御目にかゝる事を望んで居ります。

(藤村壮七)

汝のほかには我たれをか天にもたん地には汝のほかには慕ふものなし、
わが身とわが心とは衰ふされど神はわが心の磐、わがとこしえの嗣
業なり、視よなんちに遠きものは滅びん汝をはなれて姦淫をおこな
う者はみななんち之をほろぼしたまひたり、神にちかづき奉るは我
によきことなり、われは主エホバを避所としてそのもろもろの事跡
をのべつたへん

(詩 七三篇二五―二八節)

末永老夫人が臨終の数ヶ月前に既に意識されて九州修養会に間に合われるよう
に東京よりお帰りになりました。そして修養会が十月第二週でしたが、それから
ずっと日曜毎に欠かさず礼拝に出席されておられました。そうした時折東京で孫
娘が帰ることを悲しがるのでまた来るからと言ふて帰りましたが、もう一度行け
るとは思いませんでしたけれ共、と仰っておられました。身体が弱いから何時臨
在に近づくことが出来なくなるかわからないからと遠いところを礼拝に励んでお

られました。

一月の半頃まで出席されました。私が昭和三年五月福岡に参りましたが、早天祈禱会に礼拝にとあらゆる集会にかかさず出席されました。

(折滝鶴治郎)

集会をやむる或る人の習慣の如くせず、互に勧めあい、かの日
よいよ近づくを見てますます斯の如くすべし

(ヘブル十章二十五節)

此の聖言の如く三十年間の長い間には教会にも出たり入ったり色々な人々がありました。私を感じますことは如何なる場合にも先づ祈ってハッキリ聖霊によって聖言を与えられてなされたということであり、多いお子様方の結婚などにつ

きまして聖言を与えられてお決定なさつたのであります。私が福岡へ参ります頃までは病院か転地かして大変お弱かつたようでありますが、大変お元気になられて御主人の御臨終の折の御看病の時などは御主人が御母さんに看病して貰ふとは思われなかつたと言われておりました。

浜ノ町時代にも祈りの室を与えられたいと祈って祈って遂にお二階にその室を与えられて造られました。早天がすみますとよく数時間毎日梶浦のお母様と祈っておられました。本当に祈りの人でありました。末のお嬢様の御病氣の時など長い長い数年間おやせになられましたお風呂などで流してあげるとき、ほろっとすると言われましたが

視よ我万物を新にせん。 黙廿一章五節

といふ聖言に立たれまして見ゆる所によつて信仰を失わずアブラハムの如き信仰をもって勝ち抜かれたのであります。(ロマ書四章十九―二十一節) 最後も本当に委ね切つてひたすら十字架を仰いで周囲の方々が色々と申しますと十字架を崇めて下さいと多くの人々を慰められておられました。お医者様が本当に生き

られるだけの寿命を生きのびられたのだと感心されたとのことでありませう。

聖徒の死はそのみまえに貴し。 詩篇百十六篇十五節

とありますがシミシミと主を崇め奉る次第でございます。

一切の栄光を主に帰しあげまして一筆

エホバに依頼むものは憐憫にてかこまれん

(詩 三十二ノ十下半)

末永雪子奥様を存じ上げましたのは、私が主人の存命中に島原伝道の帰途一寸お寄り致しました時と思ひます。その後福岡基督伝道館が開設されて、度々寄せて頂き御世話になりました。いつも奥様のおやさしい御言葉に甘えまして泊めて頂き、又どれほどねんごろに御祈り頂きました事でございませう。その後私共が渋谷の富ヶ谷と言う所に住んで居りました時、今神戸の竹田羔一先生の奥様照子様が青山学院の家政科に御通学なさいます為お預り申上げます事によりま

して大変御奥様にお祈り頂きましたことは忘れる事は出来ません。御卒業と共に御招き頂き色々御愛の御取扱いを頂き感謝の数日を過ぎさせて頂いた事でございました。京都聖会に於きましてもいつも佐伯先生の応接室に於て御聖会の為め御家族や御知り合いの皆様の為めに心を合せてお祈りの時を持たせて頂きました感謝で御座いました。その後御病氣になられましたでしたが信仰の篤い奥様は神様の御愛に由り癒され遊ばされました。御殿場夏期聖会に殆ど毎年御出席になりました恵まれ遊ばされた事で御座いました。其の都度私の小さい家にも必ず御越し下さいまして熱心なお祈りを御一緒にして頂き、福岡の教会の為め、御家庭の皆様のお一人お一人の名を挙げて、共々にお祈りさせて頂きました事は今も忘れる事が出来ません。その時のお声が今も耳に残って居ります。あのおやさしい静かな御姿は片時の間も忘れる事は出来ません。或る時姫路からお独りで寝台車で福岡へ御帰りの車中で一つの読み物を繰り返しお読みになり、大変めぐまれて長い車中も短かく感謝の中に帰りましたと御ハガキを頂きました。いつも主が偕に在ますことを教えられました、主のみまえに感謝申上げた事でございました。

主の御愛のふところに包まれ給うて今も尚お祈り頂いて居りますことを覚えまして御なつかしく存じて居ります。聖国に於いて御目にかゝる日を樂しみつゝ

(拓植きぬ)

雪子奥様の記念の御本が、出版されると承り、それはよいことだ、大勢の人があの堅き信仰と、聖言を單純に信じなさいました美しい信仰と、熱心な御祈り、又真実な御行為は多大の感銘と、利益を受け又力づけられることでしょうと思ひました。

尚特筆すべきは、愛の実行者でありました。昭和七、八年頃、実枝子さまと御一緒に、神戸に來られ、教会の近所に家を借りて、日々祈られたことがありました。何ごとも先づ神を崇め、かつ信じ、熱心にお祈りなさいました。御健康や、靈のご向上のため、又御家族や、其の他多くのためにも御禱告になりました。

ハンナが苦難の中から、熱心に祈りをさゝげ、遂にその祈りが答えられて、サ

ムエルが与えられた様に、奥様の祈りに答えられて、クリスチャンとしての素晴しい一門が生み出されました。松本先生はいうに及ばず、弘海先生の様な、聖靈に満された、能力ある器が与えられて、ほんとうに御幸福なことであります。

癌と診断されなされた時も、只管死人を甦えらせ給う神を信じ、疑うことなく神に祈り、又多くの聖徒たちに禱告を依頼なさいまして、聖靈の顕著な、お働きにより、癌は姿をひそめ、全き健康を保たれ、長寿せられたことなど、実に御立派な信仰、いな偉大なる尊敬すべき信仰の、勝利者といわざるを得ません。

昭和四年頃より数年間に頂戴した、御手紙によりまして、奥様の篤い信仰と、御愛を忍ばせていたとき、かゝる聖徒を起し給いし神を崇め、御一門の祝福を祈りつゝ筆を擱せていたときです。

(坊向久正)

私がまだ修養生として神戸に居った頃、当時福岡で伝道をして居られた大江先生が、病気で倒れになったので、暫らくのお手助けの為福岡に参り、桑原先生

のお宅に泊めて頂いて、あちらこちら伝道することゝなりました。

其の頃靈的な恵みを求むる方々のお集りが時折開かれ、その席上でお会いしたのが始まりで、更に数年後堀内先生のお後をうけて博多の教会を四年間牧会することゝなり、その後は度々お宅にも伺って親しくお交り申すようになりました。いつも優しく親切にお迎え下され、さながら慈母に接するような温かさを感じました。お身体が弱かった為多くの時を病床にお過しになって居りましたが、一切を打任せ極めて平安な様子であり、自らの病苦を忘れて人の為にかくれた御奉仕をして居られました。実に典型的なクリスチャン婦人で、御靈の結ぶ果が豊かに其御品性の中に実って居りました。

愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制。

(加 五〇廿二)

その果の一つ一つが悉く美しく果を結んで居るのが見られました。

かつて竹田家の御結婚披露宴の席上に於て故佐伯老先生が、結婚スピーチをされると云って、佐伯家の御結婚の砌り、末永家の実状調査の為九州迄出張せられて、

同家の家柄、家族の状況等問合せられた時多くの場合母親の感化が其子女に対して甚大であること思い母上のことを尋ねられると、誰も彼もが口をそろえて、あのお母さんは稀に見る立派な方で或者は聖人と云い或者は女神と云って居ると云うのを聞き、いよいよ嫁とりを決意したとお話になったことを思起します。ご老母は余り表に出ないでいつもかくれた生涯をお送りになりましたが、神と共なる御生活から溢れ出づる生命が御一家の祝福の土台となり、又多くの人々に良い感化を与えられた動力となったと思います。然し此感化と祝福とは今も尚続いて居るのであります。

(沢村五郎)

彼は死んだが信仰により今尚語って居る。

(来 十一〇四)

主イエス様のお恵みによりまして、私は今年（一九六一年）満八十九才を迎えることが出来ました。

思えば長い人生の旅でございました。ふり返ってみますと、喜びも悲しみも、たゞなつかしい限りでございます。殊に老年になりましたからは幼い頃の事が色々と思ひ出されます。

末永ゆきは私の次の妹で兄一人と四人の姉妹の環境の中に育ちました。明治八年生れで私とは三つ違いでございます。私と性格が違って居ました。私はどちらかと申しますと内気で働くことが大変好きでした。私は綿から糸を引いて機織る事が好きでした。十三の歳から機を織りました。妹は明るく快活で人様から愛されました。六才の頃ことに人なっこくお隣のお嬢さんと一緒におどりを習っていました。

「沖のくらしいのに白帆が見える。」

とその様子がなかなか上手で熱心であったことは妹らしいと思わずにはいられません。

八才の時大名小学校に入学、ここでも先生や上級生の人達からも可愛がられ成績も良く本を読む事が大変好きでした。又静かな性格でよく貸本屋から借りて来て、行燈（あんどん）の灯の傍で父からむつかしい本を習って居りました。

十三才の頃のこと小倉に一ヶ月余り遊びに行つて居りました。その時の手紙に
しらすぎも　おとらぬように　たちたるが

今は　わが家が　恋しかりけり。

と書いてありましたので、母がさっそく迎えに行きました。勝気ではありましたが純良な少女として豊かな心を持っておりました。

福岡には其の頃女学校がなく長崎のミッションスクールに進みたかった様ですが、身体が余り丈夫でありませぬので母が心配しまして私と一緒にならと申しました。私が、私は好みませぬので進学出来ず残念がっておりました。

十八才の時末永に嫁ぎ三十二才の頃メソヂスト教会の伝道師加藤女史のすゝめ
で二人が信仰に入りメソヂスト教会で洗礼を受け教会へ行く様になりました。はじめ私が信仰に入りました、その頃伝道師の加藤女史がなかなか熱心な方でして、

私の子供が未だ小さくていそがしく昼間の礼拝に出られませんので夜しか教会へ行けませんでした。昼間炊事場でパタパタしている時、立って来て信仰の話をして是非教会にいらっしゃい、と云われたので教会へ行く事に成りました。(その頃余りいそがしくて教会へ行って居りませんでした。)大変良い話がありました。ようわかりますので妹へ「加藤さんの話はわかりやすく書いていゝから此方へ来なさい。」とすすめました。夫れで妹も信仰に入り一緒に洗礼を受けました。

私は姑が居りますので一寸朝などなかなか出にくくて、初めは姑からやかましく云われていましたが、だんだん姑が「其処はそのまゝにして置いて、朝行きなさい。」と云うて呉れましたので行ける様になりました。妹の方は姑がごさいませんけど末永の主人がきちょうめんな人でやかましく言われますので私も妹も教会へ行くのにも気兼ねでした。後には末永の主人が救われて、信仰に熱心に成られて妹はほんとに幸いでした。又その主人の上になされエヌ様の聖業と恵みにより、私の主人も救われました。

多くの先生方のお導きによりまして聖書の中に

主イエス、キリストを信ぜよ、然らばなんちおよびなんちの家族も救わるべし。(徒十六章三十一節)

の聖言の通りに救われて毎日感謝の日を送っております。

(昭和卅六年五月八日)

(猪城ふじ)

義人は信仰によって生くべし。

あゝお懐しいお姉様、お召されなされてもう四年、あんなに安らかに召されていらして天国で、神様のお側で楽しく、地上の皆様や私共の為に執成して待つて居て下さると思えます。

幼い頃の思い出は、お姉様は大へん几帳面で、私もよく髪の乱れや、えもんを直して頂きました、又読書が大変お好きで本を読んでいられるお姿が目には浮びます。お話もお好きで、私がお母様に甘えて困らせていますと、私を呼んでは、親孝行のお話や中国の司馬温公が水瓶を石で破って子供を助けた話等して下さいま

した。学校では上級生の教室まで先生に連れて行かれて、お話をなされたそうです。又踊りもお好きで、春雨等を教えて頂いたのを憶えて居ます。

十代で、末永家に嫁がれましたが、その頃の島田に結われたお姉様は、ほんとに美しいと思いました。お若かった為かよくお母様をお呼びになりますので末っ子の私は、淋しくて抗議を申込んだ事がありました。それなら、「では一緒においでなさい。」と云われましたが私迄行くと、お父様がお淋しくなられますので、我慢していました。松本さんの時子さんが生れられてからは一層行つて居りました。あまりお丈夫でなかつたもので、よく温泉へ、保養に出かけられました。私もお供させて貰つて楽しかつた事を思い出します。その後浜ノ町にお家が建ち私や子供達の弱っている時は、招んで下さいまして養生させて頂きました。その中に教会が設けられまして、日曜毎に礼拝の後お邪魔するのを楽しみにしていました。何時も「私がこんなに丈夫になつたのは、神様のお恵みで信仰によって靈肉共に救われたから、御許も平穏な時、悩みの時があるでしょうが、詩篇廿三篇を読みなさい。エホバが牧者となつて下さるから、只凡てを委ねて祈っていれば

必らず最善にして下さる、時折のしもとは、却って慰めとなるから」と仰言っていました。

その後子供達が遠方に出ていました時、火災に遭い、逢坂のお家にお世話になっていました時も毎日お姉様のお部屋に伺っては、聖書を、読んで頂き、物質は無くしても、心の平安を得る事が出来まして感謝でした。御病氣になられてからも、あまり御苦痛をお洩らしにならず、その頃お弱りだったふみ子さんや、姫路の事を心配なさっておいででした。お食事が段々進まれなくなり、召上りたい物伺っては、猪城の姉上と集めてはお持ちしましたが、落や、白魚、お漬物をお喜びでした。その中何も召上らず、お水をお口に浸して上げる様になりましたが、そのまゝ主に在る平安の中に安らかに、お召されになりました。此れが地上でのお姉様とのお別れとなりました。

帰りの車で附添の方と一緒にりましたが、「私もずいぶん沢山の御病人にお付きしましたが、此方の御隠居様の様なおだやかな何時もお優しい方にお付きした事は初めてでした。ほんとうに信仰の篤い方の最後は違いますね。」と感心し

て話されました。

その後ふみ子様もお恵みで、癒され、一生懸命神様の御用の為に、励んでいらつしゃいますので、お兄様、お姉様も、天国から、喜んで御覧になっていと思ひます。

(高田こま)

あ　り　し　日

あじさいのぬれたおいのりの

あさがあり　夕べがあつた

主をよべば　さびしがらせる　蟬しぐれ

もくとう(黙禱)の座を　小寿鶏が　たか啼いた

○
松籟にひびろぎゆき いのりのひとの

白哲の腫はいのりを地へちにとじた

天にまします、我らの父よ、願わくば、聖みな名をあがめさせ給え

私は人をほめるのが不得手で従って自分がほめられるのもきらいです。

アダム以来人間は罪には生まれ、生れながらに亡びの子で、ほめらるべき何物もありません。

ただ在りし日の思い出づるまゝを一つ二つ。

かって私の母の臨終の時の日記に、

臨終の虎空をつかむ指あかるく。

くるしさをかなしみなきし母なれば

主のあわれみのうしをみちきし

之に反して叔母さんはたえざる感謝と祈りによって、その苦しみに耐え、静かに、静かに白哲の腫をとじられた。

生前もその喜怒、哀楽を顔や態度に表わされることがうすかったようでした。私が指圧をしてあげる時必ずスヤスヤと眠られました。かつて一度も「よく眠った」とか「気持ちよかった」とか言われたことがありませんでした。私の初めの結婚後間もない時、家内が叔母上の病気お手伝いに呼ばれて、だんだん日数が延びましたので、私若気の至り耐えかねて叔母上に「神の合せ給うた夫婦を離してかえりみないのは悪魔の仕業です。」と言う様な手紙を出したことがありました。之に對して何も言われませんでした。私は自分のはしたなさがいつまでも気になったことでした。

私の母と叔母上が生れつきの性格なり信仰生活などがちがって居られますが

われらの尚ほろびざるはエホバのいつくしみにより、そのあわれみ
みの尽きざるによる。

哀三章 廿二節

とございます。尽きざる主のあわれみに包まれ、たゞ感謝でございます。

(鈴木喬栖)

私が末永の御母様とお交りさせていただきました機会は、あまり多くござい
ませんでした。けれども御愛の深い御母様をしのび、一筆かかせていたゞきます。
どなたもお感じなされたこととございましょうが、御母様は実に敬虔な聖徒で
おいでになりました。又全く祈りのお器でいらしたという印象は脳裡にやきつけ
られて取去ることは出来ません。「祈りの人」でありになりましたればこそ、
姉上や御子様方皆様があんなにうるわしく御成人なさいました御事と、神様をあ
がめ奉る次第でございます。

又私達兄弟のためには、母が召されましたのち、御母様は母にかわって御愛を

もって切にお祈りいたゞきましたことは、何と御礼申上げてよろしいか言葉がございません。

癌がお癒されなさいました直後、京都でお目にかゝりました。その時「ダビデが神様の御手におちいりました（サムエル後二十四章）ことを示されて、神様に全くおまかせした時いやされました。」とお証を聞かせていたゞき、その深い御信仰に心うたれたこととでございました。何とか御母様の御足跡をふませていたゞきたいと切に願う者でございます。

（藤村忠子）

慕いまつる、末永の伯母様、天に凱旋遊ばして四年、私は今、伯母様の在りし日を偲び、限り無き追憶にふけて居ります。御生涯を只信仰に生き抜かれまし
た事、人の救われる事を一番御喜びになつた事、神様の御用の為ならどんな遠方
えでも御出ましました。

私は戦争中に主人の勉強の為二年を福岡で過しましたが、愈々福岡を発ちます

日、駅ではからずも、伯母様にお目にかゝりました。

私を待合室の片隅に呼んで、「危い横須賀に帰ったら詩篇の四六篇をお読みなさい。」と申されました。私は十五才の時、洗礼は受けましたが、名ばかりの信者で、増して未信者の家に嫁しましてからは、此の世的の幸せに満足して日々を送っていました様な状態でしたが、帰りましてからは、伯母様の御言葉に従い、聖書を読む人となりました。空襲中に、そっと抜け出しては誰方も出席しない教会え、只一人祈って頂いて帰って来ました。近所の方がどンドン疎開されて行くのに私はほんとに平安で踏みとどまれたのも詩篇四六篇がどんなに大きな支えに成ったか知れません。それから次々と病気を致しましたが、その度にほんとうにお世話になりました。遠く離れていても、只伯母様のお祈りに支えられ、癒やされて、遂々手術もしないで丈夫にして頂きました。辻堂の松本様に御滞在中、私の家にもお越し下さいました時も祈って下さいました。ほんとに祈りの方でした。御病氣中途坂の御宅にお見舞に上りまして、御病室に入れて頂きましたが、ニコリと笑って輝いておいでになったお顔、私との約束だったと覚え、お写真を見

せて下さいました御愛ほんとうに忘れる事が出来ません。

子供の時からどんなに、御世話になったか言葉では言い表わせない程でございます。何もお報い致す事の出来ない中に、地上でのお別れをして終いました。でも伯母様、喜んで下さい。光枝はほんとうに今、神様に贖われた喜びで一杯で御座います。魂の底から、聖名を讃え切れぬ程の身として頂きました。柿沼も、主を仰ぐ人と変えられました。今伯母様が残された種が、この様に葉繁り、花咲き、果実する時がまいりました事を心より感謝申し上げます。

(柿沼光枝)

「一粒の麦地に落ちて死なずば、一粒にてあらん、死なば多くの
実を結ぶべし。」

末永の御隠居様は主イエスエの信仰の証し人として、愛に燃えて如何に多くの
実を結ばれました事か！

今御信仰の足跡を綴るに当りまして、あの御愛と信仰によって救われました者の一人として、言葉に表わせない喜びと感謝に溢れて参ります。

はじめに思い出されますことは、すべてが信仰につながった御日常であられたこととございます。まだお若い頃お側にしばらく御仕えして居りました頃の事とございました。大変おやさしく取り扱って頂きましたが、私の我儘でこっそり帰り度く成りました時

「あなたは私の方から帰りなさい、と言っても神様を知るまでは動きませんと云う位にならなくてはね、」と祈って下さいました。信仰に堅く立った御生活をしていらっしやつた事を忘れる事は出来ません。人は物が豊かになりますと、粗末に扱いやすいものでございますが、常に主の尊い賸いの血の故に、神様からの賜物として燃料の一塊も一片の石鹼を使うにも、感謝をもって少しも粗末になさいませんでした。「暮しは低くとも思は高く。」「人を師として生活して行く様に。」此の様な日常の御生活を通して教えて頂きましたことが、今も貧しく、ささやかながらも妻となり、人の子の母となり一家を築いて参ります時励ましとなり、慰

めとなります。

又大変素直なお方で御自分の落度に御氣付きに成られますと、どんな小さな者にも「済みませんね、」と詫びていらっしやいました。且那樣御昇天の機「両手をもぎ取られた様です。」と御力落していらっしやいました。「今頃迄且那樣が生きていらしたら、ラヂオ等も楽しめる事が沢山あるのに」としみじみおもらしに成った時、妻としての御隠居様に触れた様で感慨無量な思いが致しました。

御召されになる前、御伺い致しました時、胃癌と云う悪質な病氣にも拘らず、御苦しみの様子も見えず、ラヂオの教養番組に耳を傾けられ、近親の皆様との信仰の交りの中で、少しも停まる事なく前進して居らっしやいました。御子様方に対して「いゝ母でありませんでしたのに子供達が皆よくして呉れます。」と感謝していらっしやいました。帰ります時も詩篇一一二篇の聖言葉でお祈りして下さいまして、しっかり手を握ってさようならとお別れいたしました。

事ある度に祈り、導いて頂きました祈りのお母様を地上から失いました悲しみは断ち難い思い出で一杯でございます。

後に信仰をうけつぐ若奥様を与えられましたとお恵みを感謝して、八十二年の御生涯を聖書に基き神と偕に歩まれました御足跡の万分の一でも歩み度く願って居ります。

(伊熊いわ)

末永の御老母様が天国へ召されました、早くも四年になりますが、私共の心には今も尚昨日の様に、その柔和な御優しい御顔が目には浮びます。

私共一家が挙げてエヌ様にお従いする様になりましたのは一九三四年で、此れは末永御一家様の御熱心な御導きによるものでございました。当時私は中学生でありましたが、父の友人であります末永敏毅先生御夫妻に愛せられました西公園のお宅で日々を楽しく過させて頂きました。当時浜の町の御本宅に教会がございましたが、日曜礼拝毎にお優しい微笑で温かく迎えて頂き、何かと手厚い御もてなしを受けました事を覚えて居ります。

その後私が医専に入学致しました頃より戦雲急を告げ、日支事変から第二次世

界大戦へと世の中は物情騒然として参り私も軍服に身を包み、ビルマに参戦致しました。丁度その戦争の最中私の父が旅先で客死致しまして、当時唯一人で留守を守って居りました母はその悲しみと孤独に全く途方に暮れ、悲歎のどん底に沈んで居りました。その様な折御老母様は母を覚えて居られました、お屋敷にお招き下さいまして数日を過させて頂き、種々御慰め、御労り下さいました。そしてエス様の御愛により、その悲しみを少しでも和らげて下さるうとなさいました。母はその御親切を身にしみて感じながらも、夫を失くした悲しみにやる方なく、主の御愛に御縋がりすることが出来ず、御老母様に変我儘なことを申し上げた様でございます。然し御老母様はお怒りになることも無く、その後も機にふれ温かく御見舞い下さり、その御愛の深さは到底常人のなすことの出来ません事で、母は何時も感激を新たに私共に語り聞かせて呉れます。

第二次世界大戦も漸く終りを告げ、再び平和が訪れました、一九四六年私は焼土と化した故国に、九死に一生を得て帰って参りました。当時父を亡くし、家財を焼き、唯一人疎開して留守を守っていた母を抱えて、私は研究に、生活に追わ

れましたが、幸い産婦人科医院を開院することが出来まして、漸く土地や家を与えられ、その負債返済に夢中でございましたが、その頃から戦地での無理が募り、胸を患い人工気胸にて病巢を押えつゝ働き続けて居りましたが、遂に膿胸と云う絶望的な病を併発し、長い間病床に横たわる身となりました。丁度その頃教会も大濠に再建されました、私共も再びエス様付近に近付き愛する天のお父様に救を求めて居りましたが、病氣は唯悪化の一途を辿るのみで、その矛盾に打悩んで居りました。遂には身を動かすことも出来ず仰臥して天井を眺めて暮す日が続きました。この様などん底の生活に打ちのめされ、明日の希望もなく、思い悩んでおります頃、御老母様は私の病篤きをお聞きになり、日曜の礼拝後は必ずお訪ね下さり、時にふれ折に合う適切なエス様の御言葉を賜り、私共の思い悩んでいる事に解決を与えて頂きました。

私はそれ迄医学的療法に一辺倒でございまして、必死になり医書を繙いては、何とかして治りたいと云う気持で一杯で御座いました。御老母様は早くもその様な気持を見抜かれたのでございましょう。己が義に就くことなく一切をエス様に

委ねなさいと御教え下さいました。この御言葉はそれまで曇つていた心の重荷を取り除き、肉体の苦痛を柔けて、新しい希望と力が湧いて参る様になりました。その後は全く拭われた様に心も晴れやかになり、一切はエス様が御存じであつて、お見捨てなさることがあろうかと言ひ強い信仰が生まれました。その後は御老母様の御姿を見ると自分は何と幸せなのだ、かく信仰篤き教会の御長老に愛せられ、私如きものゝために、御老体をも惜しまれず、一生懸命お祈り下さり、御力づけ下さるその御愛に感激し、感謝し胸の熱くなるのを禁じ得ませんでした。そして又ある時は藤村壮七先生や末永弘海先生の御来福なさいました折は態々これらの先生に御願ひして下さいまして、私宅に共々にお出で下さり篤いお祈りと御導きを受けることが出来ましたことも忘れることの出来ない感激でございました。この頃より私や家族一同は凡てを御老母様にお縋り申上げ御相談申上げて事を決めて参りました。

当時入院のこと、手術を受けること、一つ一つが私に取って重大な岐路でありました。その様な時御老母様にお祈りして頂き、御聖霊によって御示し下さる御

指図により、私は全く奇跡的に一命を取り止めることが出来まして、今日再起するまでになりました。全く感謝の外ございません。

御老母様のことで私が特に強く肝銘致して居りますことは、手術を前にして殊に肋骨九本切除後は、果して身体の機能が以前の様に自由に働けるかどうかと云う不安のためと、一つには長い間の療養費捻出のため現在の病院を閉鎖するか、或は他の職業に転換致さねばいけないのではないかと迷いまして、御相談に伺った事があります。その時御老母様はお優しさの中にも毅然として浩秀さんの御職業は天職であるからお続けにならなければいけませんと仰言ったそうでございます。私はそのお話を伺い今更乍ら、自分の信仰の足らなさと同時に自分の職業に対する熱情の欠けたることを恥ずかしく思いますと同時に、御老母様の御信仰のバックボーンが如何に確固たるものであるかと云う一端に触れた様な気が致します。

御老母様は決して御優しさだけでは無く、凡ゆる艱難にも動ぜられぬヨブの様な強い御信仰の持主であられたと思っています。

御老母様の記念会には多数の方々のお証しがございますが、それをお聞きすると誰方様も、御老母様を御自分の母、否それ以上に慕われて居られます。それ程御老母様の御愛は深く偉大で、接する方々凡てに、御慈愛と御温情を注がれていた事がわかります。このことは聖書を読んで居りますと如何に御老母様がエス様に御忠実であられたかを知り、その誰もが実践する事の難しい事を成し遂げて居られることに気付き、今更にその使徒としての偉大なる御足跡に畏敬の念と追慕の念を禁じ得ないのでございます。

(久保山浩秀)

一九六〇、一〇、二七、

今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである。

(黙 十四ノ十三。)

聖書の聖詞通りに信仰をもって備られた聖国へ召されなさいましたあなたは信仰の勝者でした。彼は死んだが信仰により今尚語って居る。あなたを永久に忘

れる事の出来ないのは私だけではありませんでしょう。

昭和の初めロスアンゼルスで信仰に導いて下さいました川島牧師先生が福岡へ行くなら、家族が末永家に御世話に成っておるから、尋ねる様申されましたので、帰る早々にお伺いして色々御世話になりました。

土地に慣れない私共は教会が何処にあるかもわからない時でもありました。御宅の毎朝の早天祈禱会を川島先生の奥様が紹介して下さいました。此れが御宅との交わりの始めてございました。私共夫婦は毎朝の祈禱会によりほんとに心の糧をいただいております。昭和三年の秋、風邪がもとで病床の人となりました。夫に対して全家族揃って、何くれとなく御世話下さいました。再起を祈って下さいましたが人の思いと神の思いは異なりまして、夫は主の聖元へ召されました。最後の別れの言葉に、皆様の主に在る御愛に対して心から感謝して一足先に勝利の中に天国へ参りました。葬式も御宅で万事御世話下さいました事は土地に不慣れな私にはどんなに嬉しかったか忘れる事は出来ません。

その後御宅の近くに住む様になつて早天祈禱会へ出る事が出来ましたのも神の

摂理であつたのでしようと思ひます。その頃御身体も弱い様にお聞き致しましたし、又御見受けもいたしましたが、何時も誰よりも一足先に坐つて、敬虔な態度で輝いた御顔で神に直面した様な祈をなさつて居られました。その御様子を見て私は心打たれました。

此の様な祈りがあつてこそ、大事業者の妻として御主人を第一線に立てられ、又多くの御子様を、親類を、知人方を、御導きなさる事が御出来になつた事と思ひました。實際私はあの時から一生未亡人としてかたく主に仕える覚悟が出来ました。

其の後今の中部教会の婦人伝導師古沢スエ先生をお宅の集りにて紹介して下さいました。色々な問題のために、度々三人で祈り会をいたしました。その中にキリスト教の養老院を神に建てゝいた度いとの話が出て、この事のために祈りましようとして申し合せました。然し戦争になり此の事は中止の様になりましたが、終戦と成つて不思議にも、あなたの家の近くに古沢先生も私も住む様になりました。又この話を持ち上り御宅を開放して下さいる事になり、毎週水曜日の午前集る

事にきめました。

あなたは祈って居って下さい、私共二人は彼方此方場所の下見物に行つて参ります、とお願ひして水曜日以外の日は時々方々に下見に、祈りに二人で出かけました。私共は家族の者に笑われた事もありました。然しかたく主に頼りました甲斐があつて、津屋崎教会の敷地の一部を分けて下さる様になつたのが昭和廿三年七月五日でした。此の日は日曜とて私共二人は津屋崎教会の礼拝に出席して御礼と感謝をして、夕方帰り、夕食を古沢先生宅で済まして毎週日曜日の夕定例集會に御宅に参り、古沢先生のお話の後三人はいよいよ敷地の定まつた祈りをささげて、夜十一時頃まで先生宅で再度の感謝の祈を一つ蚊帳の中で捧げてやすみました。ほんのうたたねしたと思う頃、猫が何か食物を吐き出す様な声がするので、先生猫が来ては居りませんか？と二声、三声、呼んで見ましたが返事がございません。電気を燈けて見て喫驚致しました。先刻まで感謝して居られた先生が顔色青ざめておられるので、御家族の方々に早く医者に来ていたゞく様に、と御知らせして祈つて居る中、誰も間に合はず、先生は息を引取られました。脳卒中との事

で御家族の皆様にはほんとに御氣の毒でございました。私はどうする事も出来ず、茫然となって夜の明けるを待って、急いで御知らせに参りました。昨夜まで元気で祈って帰られたので驚かれました。私が養老院の土地を探すため、あまり引張り廻して御疲れになった事と思い、お詫びの祈りを捧げましたと申しました時「一粒の麦地に落ちて死なずば一粒にてあらん」とあります。先生の死が無駄にならない様祈りましょう、と励まして下さいました。葬式のためにも何くれとなくおやさしく御心遣い下さいましてどんなに感謝致しました事でしよう。

その後教団関係者、宣教師有志方の肝入りにより名も聖愛ホームと附けられて、第一ホームが実現しまして、あなたの幼な友の柴田姉が先づ一番に入院された時は、とても御安心の様にて数度御見舞に来て下さいました。又もう一人の幼な友も現在元気で在院して居られます。

何度か御病氣なさいましたが、確く神癒の信仰に立たれ、いつも癒されて主に栄光を帰して居られました。

喜寿の祝いの時も神のあわれみで、今日まで生命を与えて下さったと申してお

られました。その後不治の病ときましまして、老母方は心を合せて、今一度癒される様ひたすら祈りつづけました。然し再起の見込が立たないと聞きまして私共ホームの者一同御別れのため御宅に参りました。大変お喜び下さいまして、天国で再び御目にかゝる時を楽しみに、名残り尽きないお別れを致しました。皆々様私は神のあわれみでした。御恵みでした。とニコニコして申されました。そして枕の下から「此はホームの一番必要な時使って下さい。」と献金をして下さいました。逝られた後も御宅はホームのために何かと御援助して下さい居ります。私共もやがて天国で御目にかゝる時まで、此のホームのために働かせて頂きます。

(松崎ミツオ)

(昭和卅五年十月卅日)

私は末永の老奥様を思います毎に感じます事は、実に祈りの人であった事です。ります。

私は昭和七年一月福岡浜ノ町教会（元の福岡基督伝道館）に於いて入信以来、昭和八年からは折滝先生のもとに置いて頂きました関係で、お隣におられました老奥様には、主に在って常に親しくお交りをして頂き格別なお世話になったのであります。爾来十三年間信仰に於ける母のように思い、大きな励みを与えられました。

祈りによって深く神様と交っておられましたその御生涯によってどんなに力づけられ励まされたかわかりません。殊に長い間に積み重ねられた祈りの生活というものは若い信仰生涯も短い而も幼稚な私にとっては良いお手本でありました。ピリピ四章六節「何事も思い煩ってはならない、只事毎に感謝をもって祈と願いとを捧げ、あなた方の求める所を神に申上げるがよい。」

この聖言の通りに何事でも思煩う事なく、事毎に神様に祈ってゆかれました。日常茶飯事でもすべての事を一つ一つ祈って進む事が、本当にクリスチャンの生活である事が、私にも理解出来たのであります。クリスチャンはお祈りをする人達だと未信者の時から聞かされておりましたが、二十年もの間、祈をしらず神を

知らない生活を過して参りました私には、よく分りませんでした。末永の奥様はよくその小さな事でも事毎に神に祈って行かれました。又、テモテ第一書二章一—三節「先づ第一に勧める、すべての人の為に願いと祈と、とりなしと感謝を捧げなさい、それは私達が安らかで静かな一生を真に信心深く又謹嚴に過す為である。之はわたし達の救主である神のみ前に良い事であり又御旨にかなう事である。」

この様な禱り即ち禱告のために早朝から密室に於て多くの聖徒がたのため、又救を知らない魂のためにひたすら禱りを捧げられました。早天祈禱会には誰よりも早く出られ一番前の座に坐って静かに祈って俟望んで居られました、御姿が今も私の目にはっきり浮んで参ります。御主人も先に天国にゆかれ淋しい生活の中にも不拘、御子様方やお孫さん達のため、御家族御一同のため又教会の信者の方には勿論のこと借家に住んでいる人々のため、はては出入の職人さん（大工や左官、庭師等）まで全くすべての人のために、禱告して行かれたのでございます。私もこの温かい愛の禱りに守られ支えられて信仰を持続ける事が出来ました。

尚又肉に於いても私の生活の細かい点に迄母親の様にお氣を使われ、最も欠けたる所を主に在って豊かに満たして下さいました。

主に在る故にこそかくも卑しい者のために祈りと愛の労とを捧げられました全く心から感謝致し主を崇めたので御座います。

私が戦災後八幡に参りましたが、尚、常に忘れず覚えて祈り続けられました。本当に見えざる所に於て如何ばかり大いなる働をなさいましたかわかりません。

その老奥様が晩年には、主の旨によりまして病の床に就かれましてからも、自から戦の中であり乍ら尚多くの聖徒のため祈と願いとを捧げ続けて行かれました。実に驚くべき事であります。ヨハネ黙示録十四章十三節

「又わたしは天から声がこう言うのを聞いた書きしるせ『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである。』御霊も言う「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく。」」

この祈りの貴い器を主は御用を終らせその働を休ませ給いまして遂に豊かなる憩いに入らしめ給うたのであります。いよいよ聖言の通りでございました。

そしてその貴き祈りは一つ一つ応えられておるのであります。私もこの地上において頂く間、何としても限りなき主の愛にこたえまつる為に、この老奥様の篤き祈りと愛の労とを学びつゝ祈りの人として主に従って行けます様に切に願ひ求める者でございます。

いさゝか愚感を並べまして老奥様の思出に致し度いと存じます。

終りに御遺族の皆々様方の上に主の溢るゝばかりの御祝福が豊かに在りますようにひたすらお祈り申上げる次第で御座います。

昭和三十五年十月

(野村末義)

今は亡き末永奥様とのお交りは、奥様の御病気に、(私の療法では……)と、伝え聞かれました御主人が、私の許に使いをおよこしになりました大正九年に始まります。以来奥様のお体の治療を致しながら、私自身は、魂の救いの道に導かれ、その御縁は、信仰のお交りにと深められたのでございます。

大正九年、それは私が、治療法を学び東京から帰りまして、まだ日も浅かった時でございますが、御主人からのお迎えで、初めて奥様とお会い致しました。

奥様は、未知の私に、御不安な面持ちでございますが、とも角も私の療法に従って下さいました上、毎日お待ち頂ける様になりました。

そうした或る日、御主人が、笑顔で私を迎え入れ、「大橋さん、あなたは、神を信じてはいかゞですか。」と申されました。私は不用意に「それは結構です。」と答えは致しましたが、その後話題が変わりまして、話はそのままになりました。

実は、当時の私は、無自覚ながら魂の渴きを感じて居りました様で、沢山な偶像守りを帯の間にしつかり背負って歩いて居りました。こうした私に此の御家庭の空気は、今迄お交りした沢山の御家庭と違った温かい、なごやかな感じで心ひかれ、奥様に「何時ぞや御主人が信じては……………とおっしゃいました神様は、何と云う神様でしょうか、」とお尋ねいたしました処、「家の信ずるのはキリスト教です。」とのお答えでございましたが、時は大正九年、キリスト教も、まだ今日程普及して居りません、私にはチンプンカンプンで、さっぱり解り

ませんが、お見受けする御夫妻の御様子に感じさせられました、お奨め頂きますまゝいつか私も信じる様になり、真の神のお導きに従い、キリストの深い御恩寵に浴せしめられまして、遂には母も妹もお救いにあずかる光栄を得ました。

特に母は単純な、幼子の如き信仰生活十三年の後、八十才で主に召されました事母はもとより、子の私にも此の上ない喜びでございました。

現在尚、私達が誠に幸な信仰生活に導かれて居りますのも、御夫妻のおかげです。御夫妻こそ私の霊を救いに導いて下さった恩人でございます。

御主人から頂きました或る時の聖言、

「先づ神の国と神の義とを求めよ、さらばこれらのものは、皆汝らに加えらるべし。」又詩篇の第一篇「悪しき者のはかりごとには歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人は幸いである。」又讚美歌

「やまいの床にも慰めあり、我らにかわりて血を流せる……………」

或は

「日くれて四方はくらく……………」

唱いながらお教え頂きました事、ごく最近の事柄の様に印象深くございます。信仰に入ると悩みが増すと思うけれど、只神のみ仰ぎ進めば、必ず主は最善を成し給うと、奥様からお教え頂きましたが、後御主人御病床の折、平素お弱かった奥様が、心から看護なさり、御主人を殊の他お喜ばせ申されたと同いまして、私も非常に嬉しく存じました、そして戦後奥様のお具合が悪く、はたから危険視されて居られました時にも、「人の手に委せるより神の御手に委ねましょう。」と信仰により全く癒されました事、総て奥様の信仰の篤さ、主との交りの深さによるものと感銘を覚えます。

最後の御病床中頂きました聖言。

「とこしえにいます神は、住所なり、下には永遠の腕あり。」

「悪しき者はかなしみ多かれど、エホバに依り

頼むものは憐憫にてかこまれん」

此れ等の聖言でどんなに励まされ、慰められて居ります事でしょう。

奥様の思い出は、御主人様の思い出につながり、お二人の神との絶えざる交り、

恵まれた祈りの勝利者であらせられた、御立派な御生涯は残された者の鑑と思ひ私も貧しい歩みながら、一步でもお二人のたどられました勝利の道に近附き度いと願って居ます。

今尚いやすい取るに足らない者を導き、御愛に溢れたお交りを持たせて頂けます残る御一家様の事、尽し得ません此の身の幸も、主の僕の一人に引きあげて頂きました御夫妻の御愛に始まるものと感謝感激の他ございません。

(大橋タケ)

何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ

(ピリピ 四章六節)

エホバ家をたてたもうにあらざば、建るものの勤労はむなしく、エホバ城を守りたもうにあらざば、衛士のさめをるは徒勞なり。

御母堂様をお偲びいたしますと、様々な御教訓や、頂いた聖言のなかで格別右の二つの聖言が、強く強く心にひびいて参ります。

信仰的には言うに及ばず、すべての点に欠けだらけの私をも、お心にかけて下さいましたことを覚えまして、言い様のないお慕いさと、おなつかしさで一杯でございます。家庭に入り、子供の教育に当り、又様々なことに遭遇いたしますにつけて、一層御母堂様が御立派なお方であったことを痛感いたします。

御生前、今一度御目にかゝって、御詫びや、御礼のお言葉を申し上げることが出来なかつたことは、大変残念なことでございます。

御母堂様の「御足のあと」をお慕い致しまして、せめて不束ながらも、神様の証人として、残る生涯を歩ませていたゞき度いと願って居ります。

敬愛する末永のおばあちゃま

今日も天国から召されました古沢の母と共に、地上での生活をしている私共のために、どんなにお祈り下さっていることでしょう。おばあちゃまのことを思い出す時に、いつも尊いお祈りを思います。一月四日には毎年子供と二人お伺いしては子供のために、また私共一家のためにどんなに祈って下さったことでしょう。おばあちゃま御昇天の後ほんとに淋しくなりましたが、文子小母様（こんなこと申してお赦し下さいませ。）が私の祈りの母としてまた姉としていつも子供を愛し、また私のために祈って下さっており、どんなにか楽しみにしてお家へお伺いしてゐるかわかりません。

おばあちゃまの御生前の時から、いつもお宅へお伺いしては、お優しい皆様の暖かい御親切をどんなに深く教えられたかわかりません。とりわけおばあちゃまと文子小母様の（嫁と姑との）お仲のよさ、まるでほんとうの親子の様に……………私も保田の母とあんなに成り度いと、どんなに祈ったかわかりませんでした。羨しくって、羨しくって……………お伺いする度毎にいつもよいお手本を見せて頂き

ました。人様に対する態度、どんな方に対しても暖かいおもてなしと御親切とお祈り。

おばあちゃま方のお祈りと、文子小母様の暖かい御指導とお祈りを頂き、十五年間の小さい祈りが聞かれて、今保田の母とうとう私共の家へつい最近引越して参り。何も彼も私でなければならぬ、そして二人で一緒に祈ることが出来る様になり、この頃母もほんとに喜んでくれますし、私もこんなにこんなに嬉しいこととはございません。全く主の御栄光の現われんための十五年間の祈りでございました。文子小母様もほんとに心から喜んで下さっております。「世に勝つ勝利は我等の信仰なり。」と全く勝利でございました。どうぞこれから先、母も共に天国に行けるようにうんと毎日祈りつつ歩んでおります。どうぞ御加禱下さいませ。母とおばあちゃまが毎週水曜日十時に祈り会をなさっていらつしゃいましたように、私達も文子小母様と月一度お祈り会を始めております。何かとこの世の仕事の多い私共ですが、此の一度のお祈り会はどんなに慰められ、また力を与えられておりますかわかりません。どうぞこの祈り会のためにも御加禱下さいませ。

博子様の御一家のためにも特に毎月お祈りさせて頂き、直行様とお三人御祝福の中によいクリスチャンホームを営んでおられますから、どうぞ御安心下さいませ。いろいろ申し上げ度いことばかりですが、心から感謝をもってペンをおきます。

昭和卅五年十月二十五日

(旧古沢)

(保田三代)

末永大奥様と申しますと何時も御控え目な喜びに溢れたお顔が心に写ります。お召されになりました時、新聞に報じられましたので、或るお知合の方が有名なお方ですねと申されましたが、決して所謂世的に有名とか、やり手とか云う言葉には全くあてはまらない静かなお方で御座いました。末永様の御好意により、大奥様のお過しになりましたお部屋を拝借致す事になりました。お部屋を整理させて頂きました時、どんなに小さい物でも大切に整理して居られました。又細かく

奇麗にお継ぎになりました御召物等拝見致しまして、全く驚異の感に打たれました。

大奥様は凡てを善意にお解しになり、人をかたよって見る事をなさいませんでした。大奥様にお接しなされた凡ての方々の方に熱心をもって、おとりなしになり、一人一人の為に神様の最善をお信じになり、感謝なさっていらっしゃいました。それは宛かも人類一人一人に対する神様の御心に外ならぬと存じます。

「この様に、何時までも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは愛である。」大奥様はこのコリント人への第一の手紙十三章の最後の最も大いなる愛に生き抜かれたお方と存じます。お祈り頂きました一人と致しまして、世に在る限りは私の様なものゝ心の中にも、大奥様のお愛のお心が生き続けて下さることで御座いましょう。

(松田喜代子)

摂理の御手に導かれて初めてお目にかかりましたのは、今を去る二十数年前の事でありました。其の時愛姉は長い信仰生活の御経験を通して色々と御懇切なる御言葉を下さいました。「私がこの年令に達する迄には限り無い沢山なお恵みを受けて参りましたのは勿論の事ですが、又幾多の試練をも受けて来ました。

或る時には真黒闇の谷底に落ち込んで、詮方尽きてどうする事も出来ず、最早や絶望の中に悲歎にくれねばならない場合にも遭遇しました事も屢々でありました。然し愛なる神は其の都度御恩寵の御手を差し伸べて扶助け出して下さいました。どうかあなたも、何時如何なる事が此の後起つて来やうとも、必らず主のみを崇め奉つて、私が助け出された様に祐助を得て最後まで雄々しく戦い抜いて下さいね。」としんみりとお教え励まして下さいました。

「エホバに依り頼む者は憐みにて囲まれん。」

「此れから先き、お困りの時には御遠慮なくお出かけ下さい。お祈りをもってお力添え致しますよう。」と、なんと御親切なお言葉だったでしょう。

未知の地に来たばかりの私にとって、何と云う心強い、有難いお約束だったか

今尚忘れ得ぬ嬉しかったお言葉の一つであります。

夫れから二十余年の月日は夢の間に過ぎ去って終いました。其の間の生活はみどりの丘を行く様に長閑な楽しい時ばかりでは有りませんでした。険しい山坂も、寂しい谷間も、悲しみの胸痛めつつ歩み続けねばならない時もありました。然し主は其の都度、屢々愛姉の許に導いて下さいました。聖言に慰められ祈りに励まされて何時しか心軽く、感謝と喜悦の内に帰宅するのが常でありました。これは私一人ではありませんでした。愛姉の許には文書を以って或は尊い御体験と熱き祈りを切望して幾多の方々が御訪問された由です。愛姉は何時も快く迎え祈りをもつて励まし慰めて居られた御様子です。

喜ぶ人や悲しみ悩める人々の良き母となり、姉となり、友となつて祈り続けていらした奥様、多くの方々から尊敬と愛をもつてお慕われてこられた御奥様、常に主を悦ばせ奉る事を最上の、そして唯一の願望として幾多の御苦勞をも厭わず寧ろ喜んで、感謝のうちに重ねて居らした奥様。この美しい芳ばしき愛の香りは愛姉亡き後何時何時までもきつと高く薫り漂う事でしょう。

或る日のお言葉に、「長生きして来たお蔭で色々の珍らしい事を見聞させて頂き、ほんとに有難い事です。」と前置して次の様な事をお仰言いました。

「長生させて頂きましたお蔭で、此の度の旅先でも沢山な新しい信仰の友が与えられ、皆様始めてお会いした方々でしたが、お互に証をしたり、祈を共にしてほんとに恵まれた日々を送る事が出来まして感謝でした。主に依る友の交りはまことに楽しいものです。」とニコリ微笑されたあの明るいお顔。長生させて頂いていらっしやる事に対して、神様と周囲の方々に対して心の底から感謝し、喜んで居らっしゃった御奥様は又斯んな事もお仰言いましたね。「神様のお招きがあるまで少しでも皆様の為にお役に立てばと朝夕祈って居りますのよ」なんと御謙遊なお言葉でしょう。又或る時、「どんな苦しい時にも、主の御十字架を崇め奉る時、私の苦痛なんか物の数ではありませんものね」と長い御病床生活の中で語られた奥様でした。「病氣も神様から頂く御恩寵の一つですから喜んで感謝のうちにも、お受け致さねばなりませんね。」長い間の御病床に在って凡てを主に委ねて居らした奥様はきつと静かに目を閉じて神を崇め讚美し、祈り続けて居ら

したでしよう。御立派なその御様子に、顔に浮んで唯々頭が下がるばかりです。何時如何なる時にも神から与えられた凡ての事を、凡ての境遇を、心から感謝して受け入れ常に希望と喜悦の中に暮らして来られた奥様、これこそ私達に残された生きた尊い無言の教訓ではないでしようか。御聖言の様に凡てを感謝していらした奥様。病重しとの報に接し、最速御見舞に上りましたが大変御容態もよろしき由、喜びましたのも束の間、その後数日にして神の御召をお受けになりました。その時「エホバに依り頼む者は憐みにて囲まれん。」とお祈り下さいました。

御奥様から頂きました数多い聖句の中から、初めて御会いた時頂きましたのと今となつては地上最後のお別れの時下さいましたのと同じの詩篇三十二篇とは私にとって不思議と云うより他ありません。然しこれこそ神が私に与え給ふた憐みであり、奥様が小さき者のためにお祈り続け下さった祈りであつたのでしようと思ひ合わせる時、有難さに胸が一パイです、感謝に堪えません。絶え間なき、人生の苦難の途上に在つても神と偕に歩む者、神のうちに生きる者は如何に幸福であるかを身を以つて示して下さいました奥様。生命の有る限り神を讚美し祈り

続けて来られた奥様。どうか私も奥様の辿られた同じその道を、残されたその足跡を一步一步と固く固く踏みしめて奥様の様な立派な祈りの生涯を貫き終え度いと切に願って止みません。それは私にとっては余りにも遙かに遠く又高い大きな望みかも知れませんが。

幾十余年の長い長い歳月を心ゆくまで主を崇め数知れぬ多くの方々の為めに祈り続けて来られた奥様。何んと云う清らかな光輝ある御生涯だったのでしょう。

(一九六〇盛夏)

(高橋文子)

「主のおんあわれみを　とこしえにうたわん」

「われは完全なる愛の行為をなしつつ生きんがために、主のあわれみ深き愛にわが身をぎせいとしてささげ奉る。おおわが神、願くはわれを絶え間なく焼き尽し、おん身の中にせきとめられたる無限のいつくしみの波をわが靈魂に満ちあふ

らせ、われをして主の愛の殉教者となるを得せしめたまえ！

この愛の殉教者が主のみ前にいずるにふさわしくわれを準備せしめ、ついにわれを死に至らしめんことを！　かくしてわが靈魂はすみやかに飛び行きて、主のあわれみ深き愛に永遠に抱かれんことを！

おおわが最愛のおん者よ、「われはこの世のかけ消え失せて」（雅歌四〇六）永遠に主をまのあたりに拝し奉り、わが愛を主に語り奉るを得る日まで、わが心臓の鼓動するたびごとに、数限りなくこの奉獻をくり返さんことを望み奉る。」
これは小さき花の聖女テレジアの手になる主のあわれみ深き愛への奉獻の祈りの一節でございます。末永の祖母の生涯もちょうどこの聖女のように、主のおんあわれみに全くささげられたものではなかったでしょうか？　神への深い信頼と全きおまかせの道ではなかったでしょうか？……祖母の地上の旅路を眺めますと、この小さき聖女の歩んだ靈的幼児の道にたいへん似ているように思われます。

「主よ、われおん身に信頼せり。」浮き世のさすらいにおいて、祖母は日にいくたびこの詩篇の言葉を口ずさんだこととございましょう。主のおんあわれみに

対する限りない信頼こそ、祖母の靈的生活の土台をなすものだと思います。この信頼から生まれる神への完全なおまかせを祖母はどのように実行いたしましたでしょうか？ 「神様ありがとうございます。主よ、感謝いたします。」

どんな時にも絶えずこのように繰り返すことのできた祖母は、とくに聖靈の孝愛と剛勇のたまものを恵まれていたように思います。何事も平和に導かれているときに、感謝するのはやさしゅうございます。けれどもひとたび苦しみのるつぼに投げ入れられたとき、限らない愛にまします天父のみ手に全く自分をゆだね、心の上部はどんなに苦しみもだえても、内部の平和を保ちながら、「主よ、感謝いたします」と心から言うことのできる人はこの地上にどれほどあるでしょうか？

確かに末永の祖母は、お恵みによってこの内的平和を与えられていたと思います。祖母はまた自分に与えられたこのお恵みを他人にも分かつすべを知っておりました。祖母のまわりには、いつも絶えず、だれかが自分の悩みや悲しみを、ときには喜びをも打ち明けて、祈りやすすめを願っていました。「おばあちゃんにお祈りをお頼みすれば、すぐに聞き入れられるのよ。」……宇都宮の家でも何か

問題が持ちあがると、まず第一に報告するのはお山のおばあちゃまでした。……
祖母に与えられたお恵みの中でもう一つきわ立つものは、神のみ言葉を深くさとること
のできる聡明のたまものだと思います。祖母の何十年もの無二の親友は聖書でした。金色
に染められた夕暮の浜辺に、小鳥の歌う朝のお山に、明るい日をいっぱいにあびた気持の
よいお縁側に、聖書を手にして静かに主と語り合っている祖母の姿を、だれも忘れること
ができません。二千年のむかし、聖書の言葉を全くと自分のものとして、あのよう
に美しい神への賛歌（マグニフィカト……ルカ、二の四六―五五）をうたわれた聖母マリアのよ
うに、祖母の日常の言葉の中にはほんとうに不思議なほど自然に、聖書の句が織り合わさ
れていました。わたくしたちがときおり聖句を口にするときの不自然さは、祖母には全く
みられません。聖書をほんとうに心の糧とすることのできた祖母は何と恵まれてい
たことでしょう！ 祖母の上に注がれたあふれる主のお恵みを小さな孫のひとりとして、
また生涯を主にささげた貧しい修道女のひとりとして、とこしえまでうたい続けてまいり
とうございます。

一九六〇年八月十五日

（宇都宮道子）

思い出は山程ございますのに、何から書いてよろしいのかわからない位でございます。こうしておばあさまのことを思っておりますと、何時もほゝえみかけた様なお顔で、「美智子ちゃん」と呼んで下さいました。当時のなつかしく思い出されます。

本当にお祈りのおばあさままでございました。私共も何か心配なことがありますと、まず、おばあさまにお話し申し上げ、お祈りしていただかないと安心出来ない程でございました。

終戦後、鳥飼のお家、又、七隈のお家で御一緒に過さしていただきました日々が、おなつかしく思い出されます。鳥飼のお家では、あの頃、住宅難で、五・六世帯も御一緒におりましたが、おばあさまは一生懸命、伝道にお励みになりました。週に一度御自分のお部屋に皆さんをお集めになり、教会の方をお呼び下さいまして、伝道集会を開いて下さいました。

何時の事でしたか、おばあさまのお洋服をお縫い申し上げた事など、おなつかしい思い出の一つです。お袖を円形にして、スカートをすそ迄長くして着ていら

したお婆が今日も目に浮かびます。お可愛らしいと表現したら、びったりする様なお婆でございました。とても着やすく、お氣に召しまして、同じものをもう一つお作りした事を覚えております。

お正月には何時もお手伝に参りまして、元旦にはお婆あさまも御一緒にお祝の膳につきまして、おいしくいただきました。お婆あさまはお若い者に負けず、とてもよくお召し上りになりました、私共驚いておりました位です。

御病氣がお悪くなりまして、何も召し上れない時、私が作りましたお料理（たしか玉葱のお料理と申します）を、とてもおいしく召し上ったと伺い、うれしゅうございました。今でも思い出しまして、本当によかったと喜んでおります。私もたゞ今、家庭を持ち、子供も与えられ、幸福に過しております。御生前、何時もお心にかけて下さり、お祈りして下さった事を、つくづく感謝申上げております。

（阪本美智子）

(前略)

私は明治四十四年十月十三日？台湾に往く時御宅で集りをさして頂き御家族と桑原信兄、衣笠景徳兄などと偕にお祈りをして頂きし思出は最も印象深きものでした。自来半世紀御交誼を頂きましたが、台湾より帰還後はお目にかゝる機会なく誠に残念でございました。……………(後略)

(昭和三十五年十二月九日 八十才)

(井上伊之助)

(前略)

私にとって、末永母上は恐らくいつまでも忘れる事の出来ぬ存在のお一人であります。去る昭和二十九年、御地に於ける九州修養会にはじめて私が末永先生と共に参上致し、鳥飼本町の御別荘に迎えられて大きい大広間を私の為にあてがって下さり、聖会中その部屋を一人独占して静まりと恵みの時であった事はいまだ

に良く覚えております。そして母上も大谷姉達と一緒に末永先生も御一緒に毎日三度の食事の度毎に、りんとした中に暖かい存在をもって、いつもやわらかな雰囲気を持たせ談笑の間にさまざま話題がかわされましたが、母上は最も親しく親密に手を執って靈的經驗の指導を受けられたのは御牧先生であったと申され、生前の恩師の面影をさまざま私の知らない方面のお話を聞かせて頂いた後で私が御牧先生にそっくりだと、仰せられて、いかにもなつかしように、先生に関する想出を語って下さいました。エリシヤがエリヤの衣を受けてその二倍の靈をもらった様に、私もいかにかして先生の二倍の分を丁戴したいものだと思ひかたく誓って、切にその事を涙と共に母上と二人で主に求めた事をいまだによく覚えて居ります。

また私の恩師の一人である秋山、河辺両先生に影が形に添う様にお供しておられた堀内先生があり、彼もまた九州修養会とは密接な関係があつて、ほとんど修養会毎に恩恵の器として用いられたお話も母上の口から漏れて参りました。幼少の頃から救ときよめの經驗を手をとって導いて下さったのが堀内先生であり恩師

を共に、同じうし、導き手を共に同じうし、いつまでも話に花が咲いて食事が済んでもなおしばらく時の縫つのも忘れて話した事が、今もなつかしく私の胸によみがえって参ります。

夫君と共に心を合せて九州養会の創設以来、陰に陽に骨を折り犠牲をはらっておいでに成られただけに、靈的の深さに於いては話す度毎に頭の下るものを感じました。真に平信徒の立場に居りながら伝道者をしのぐ、かくれた大きい存在であられた事は、今尚私に大きな教訓となつて残つて居ります。

(佐藤邦之助)

落合の聖会にて初めて御見かけいたし後、姫路に参りましてからは、度々御交りさせて頂きました。或年の寒中、宇田川旅館から毎朝早天祈禱会に人力車にて御通いになられ、集会后ストープの傍で御迎えがあるまでしばらく御一人残つてお祈り下さった事、又或時は、教会の為に食器を買うて下さるとしてお伴をいたし、

白い御皿や、茶碗むしの器を頂き、今尚少々残って居りました使わして頂く度に思出の種となって居ります。又或る時は、御帰福の御土産の御用意のため御件をいたしまして、サンダルや小さいお鍋をたくさんにお買いになられました事、あちらこちらの皆様のため、細かき御心づかいの程もうかがわれました。京都にて子宮がんのため御静養の時、手術をなさらねば御生命は一年との博士の診断に対して、少しも驚かれず、今日召されても仕方がないのに、一年もあるならその間に更に魂のためよき備えをとおっしゃったとは末永先生から度々承り、信仰のよき模範として学ばして頂き居ります。又末永弘海先生に対してよく細かいことまで御注意をなさったそうです。(年若き方に対するように)、母親の子供を思う例によく伺わせて頂きます。御世話様になつて居ります私共これまで、いつも御心づかい頂き感謝申上げて居りました。最後の御病床の御見舞も申上げませんでしたので今尚、福岡にて御祈り下さつていらつしやる様に思われてなりません。汝の力は日々汝の求むるところに従わんと、いつも末永弘海先生のためにお祈り下さいましたと承り、当教会にても熱心な信者さんは、老奥様に代つて先生の為に

このおことはを握って祈り続けられて居ります。

ほんの一言だけ、充分に言い尽せませんが、なつかしい思い出を記させて頂きました。

(大西きよ)

地上の御仕事をお果し遊ばされまして、聖心の中に輝く御国に御凱戦なさいました御母上様の記念日を早くも四度目を感謝深くお迎えいたしました。記念日毎に思いますのは

「彼死ぬれども信仰によりて今なほもの云へり」

と全くこの御聖言の通りでございます。御生前御母上様のお口からは絶えず御血潮を崇める様にと、御臨終間近い時まで絶えず血潮を崇めていらっしやいました。その御様子を目の当り見せて頂きまして、神様を崇めると云うことはこの態度で

あると深く思わして頂きました。御けんさんと神の愛に満ち満ちていらっしやいました御母上様。これは私が御母上様を存じ上げましていらいお召されになりますまで、一日としてお交りになりましたことのごさいません御態度でございまして、いつもにここに遊ばして、里の梶浦の母も唯一の祈りの友として頂きまして、それによりどれだけ靈の御恵を分ち頂きました事でございませう。母も末永の御母上様に祈られつつ一足先に召されましたが、神様はそれに代へて素晴らしい母上をお与え下さいまして、私も大方御一緒に過させて頂きました。お側近くに住居を与えられました事々にお祈りして頂くことの出来ましたのは、何よりの感謝でございました。御母上様をお尋ね申上げますといつも「あゝいらっしやい、よくいらしたね」、とこれは必ず仰って下さいました。その都度無遠慮にお部屋に上って御挨拶いたしますと、必ず聖書をお開きになりました、冬子さん一寸こゝ読んで下さい、とてもうれしい聖言がありましたよ、うれしくてうれしくて血潮を崇めました、と又しても血潮を崇めていらっしやいました。

「ユホバにより頼むものはあはれみにてかこまれん」

と只あわれみの故にこうして生かして頂いてますと、いつもいつもへり下っていらっしゃる御様子には頭が下りました。いつまでも御存命で祈って頂き度うございましたのに、胃癌にて御病床の人となられました。少しの御苦痛もなく、多くのお子様の祈と讚美の中に御自分も只血潮をお崇めになりつゝ、地上の戦を終えられました。いとも安らかに聖国にお移され遊ばしました。御母上様の御生涯は小さな私の信仰生涯にいと深く大きな教訓となつて残されております。

信仰の走場を走り抜いて下さいました御母上様に感謝申し上げます、筆をおかせて頂きます。

(大谷冬子)

母は生前好んで私どもの粗末な家庭を訪れました。そして自分のやうに欲しい事を遠慮なく申し付け喜んで居りました。母の人間としての大きさを知る事が出

来る様に思いました。

又或時一緒にラヂオの経済放送を聴いて居りましたら、「これは大変よい事を教えて居る、ノートして置くとよい」と申しました。物事を徹底的真剣に取組み、小さい事も粗末にしない他人に優れた一面を伺い知って教えられた事でした。

私ども放送局に知人の有りました関係上、テレビの民間放送の当初に小さいテレビを組立てゝいただきました。テレビ放送開始間もない頃テレビ放送を視た母は、「私もこれを見てほんとに嬉れしい」といかにも進み行く世代に遅れまいと母なりの絶えざる努力をつゞけて居る事をありありと示され、今更乍ら感心した事でした。

かつて母が東京から帰福します際に、丁度折悪しく御伴する人がありませんでした偶々私が急ぎの商用で大阪へ飛ぶ事になりましたので、「飛行機なら京都迄御伴いたしますけど」と申しますと即座に「じゃ私も一緒に行く」と何の躊躇する事もありませんでした。そして京都で今は亡くなられた佐伯の父上（理一郎氏）が「私は御母さんに負けた、こわい事なかったですか」と問われましたら、「い

いえ一寸も一婿と一緒にですもの」との返事だったと伺いました。其時既に七十五才前後の老齡だったと思いますが、其勇氣、決断、信賴、これが母の一生を通じ神の最も愛し給うた人の一人として過ごし得た立派な素質だったのだとつくづく思う事でした。

(宇都宮綱衛)

(宇都宮恵満子)

昭和卅二年六月十一日百花咲き競うわけて白百合の花の色香も美わしく咲く真盛りに昇天されし刀自。

真白な美わしい姿の中につましく頭をたれ、すばらしい匂いを放つ白百合の様なみめかたち、美わしい御方と何時も尊敬申上げています讚美歌四九六番。美わしの白百合は刀自をたゝえた歌と何時も愛誦しています。老境に入りつゝありたでさえ、頭をよくない私が記念日を忘れないで、白百合の美わしく咲く六月

十一日（いゝ日）と覚えて、一生涯忘れないで記念日に祈る事をうれしく存じます。これも刀自の御徳の高さと心から尊敬申上げて、我家のピアノの上におうつしえを飾っています。

身も霊も 主に捧げ

白百合の如き姉は

いまもいましてほゝえみ

いらむ、

はじめて御目にかゝりました時は八年前の夏でした。御元氣にてにこにこしていらして、八十歳の御齡とおっしゃるに六十歳位に御見受けいたし、御若く美しく謙遜な御言葉態度は今なお彷彿と温顔に接している様です。私は前後合せて四、五回しか御目もじいたしていませんが、この感激は御人柄の御立派さを物語っています。

御頭腦のよさは十人の御子様それぞれ優秀で謙虚で世にでていらして、眞の立派な御信仰に徹していらっしゃるので証明されています。

御子様方御立派な御母上様を少しも御自慢なさらさないで、たゞにここにこしていらして頭が下る思いがいたします。

終戦後老人ホーム問題、稼姑問題、肌さむくなる汚れた悲しい淋しい心境の方の多い現世に、末永様御一家の美わしさ。

刀自の文子御姉上様に対する御慈しみ・御姉上様の御愛慕・小姑様方の文子御姉上様に対する御愛・心温まるこの御心境この美わしい御家庭御一門声高らかに主をほめたゝえ、暗い世の光となって頂き感激でございます。

七隈の里は御聡明なる御子様の御設計の家々が多くの内外人の来訪者が心をうるおし豊かに迎えられ、心あらたに祈りつゝはげめよと無言のはげましをうけ、一歩御屋敷に足をふみ入れますと、堅張感をひきおこします。

数しれぬ多くの小鳥のさえずりを愛の御声で迎えられている様です。小さな愛犬まで歓迎して、あの券囲気は他家にみられぬ刀自の遺された平和郷でございます。

実に生きたバイブルそのものようです。私一家は今春主人が大阪本部転勤と

なり神戸に住む事になりました。

照子様（刀自の末から二番目の御嬢様）の生田教会に御世話になっていきます身の幸を感謝しています。

刀自の若かりし頃この様に祈り深い方でいらした事と、御愛深い御言動にいつも感謝の中に御世話になっていきます。

白百合に似たる

みめかたち　　美わしの

刀自今も香りて

昨年の婦人之友に

「人世の黄昏を思うようになったこの頃太陽が西に沈むときあんなに美わしい夕焼があるように人の世の日暮にもあの様な美わしさ壮嚴さを持ちたい」と戦っていました。この言葉は刀自にもっとも相応しい言葉と存じます。

入日の美わしさ壮嚴さも見る事は出来ませぬ蟬りの日雨の日と、様々の条件の悪日には見られませぬ、都会の狭い生活にはなかなかみられませぬ様に、刀自の

様に壮嚴かつ美わしい人生を全うされた方も数少のうございます。幸に私の小さな住居の台所は西で、日々様々の入日を見て無言の中にはげめよと教えられている様で、祈りつつ日々生活を感謝の中にさせて頂いています。愚かな僕の集ひでございますが、御導き下さいました事を感謝申し上げます。

御一門の御繁栄と御健勝を祈りつゝ拙い筆を取らせて頂きました。

(景山玉恵)

私が故末永御母堂様を知る様になりましたのは、大正年代の私と親交ありし故土肥修平牧師先生からの御噂に始まりました。同先生より基督教信者としては御信仰が穩かながら熱烈なる信者の御方との事を聞き居りました。亦先生の紹介によりて故松本時子夫人に御面会する事が屢ありまして、全夫人の深き御信仰を通して、故御母堂様の御信仰が亦深き事も想像して居りましたが、其後私が博多に御訪問し又御本人が御上京の機会に親しく聖句を引証して、御信仰を語られる温

顔に接した事再三にて其都度私も信仰を励まされました。現文子夫人の実家一族が基督教を信仰し、亦近年は私の分家が福岡に転任して以来、同地教会員となりて福音に感謝して居りますが、是皆故御母堂様から真に主にある福音を感得した結果であります。亦日常生活上の厚き御交誼にて御愛情深きに感謝して居ましたので、私も亦故御母堂様に感恩の念に満ちて居ります。併し既往を省みて尽きぬ感謝と共に惜しむらくは、故御母堂様の最初の紹介者たる故土肥牧師先生及び故松本時子夫人が既に故人となり居られる事続き、故御母堂様亦先年昇天せられた事で私の信仰上寂寞を禁じ得ない者があります。併しながら聖書は左の如く故人を賛え私を励まして居ります。コリント第二の書第一二章

私はキリストにある一人の人を知って居る。此人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた……………神が知って居る……………私の弱い時こそ私は強いのである

又テサロニカ第一の書第四章に

兄弟たちよ眠って居る人々よついでには無知で居てもらい度くない……………キリ

ストにあつて死んだ人々が先ず最初によみがえり。それから生きて残つて居る私たちが彼等と共に雲に包まれて引き上げられ空中にて主に会ひ、こうしていつも主と共に居るであらう。

真に故御母堂様は末永家の基督教信仰の中心として御一生を全くせられ、加之故御母堂様に接した我等の総てに主の福音を十二分に伝え励まされたので、感謝尽きぬ次第であります。

(景山 質)

主にありて敬愛したる末永御母堂雪子様がこの地上の御用を終えられ、か弱い肉体の持主であられしにもかかわらず、八十二才の御高齢で神のみもとにお昇りになつたのは昭和卅一年六月十一日で、実に過ぎ去りしこの年月はさびしいながらも、信仰による御母君様の御事を偲ぶことの切なるものを覚えます。

末永御母君様こそは聖言に活かされ望みをいと高きにお持ちになりました。この世の榮をよそに神知る善の知識を求められ、生命の道に日々を歩まれたその美

しいお姿こそ例えるものないおなつかしさです。私一生のうちこんなお方にめぐり会ったのも、不思議な神の御摂理による愛の賜物であったことを感謝致して居ります。松本卓夫先生先夫人時子様（末永母君の御息女）と共に、私一家のために清いお祈りをささげて下さいましたので、私は幸福そのもので生涯神の御手に捕えられてつつまれて、よろこびも悲しみも末永母君及松本夫人に支えられて今日迄過させて頂いたので御座います。私の二人の子供のためには、特別にお心を用いて熱いお祈りを頂きました。信仰深い松本時子様及御弟妹をお育てなされしお母君のお祈りは、御家族はもとより縁につながる私共までもかく御思寵にあづかることの御あわれみを感じする次第で御座います。一つの例を申し上げます。

昭和四年十一月私の次男（生後半半位）肺炎に罹りました時、末永母君へ御禱告御願申上げました（電報にて）。翌朝御返電に接しました『ソノウタレシキツニヨリワレハ癒されたり』『エホバは我等の不義を彼の上に置き給べり』のみことばと共に自ら懲罰をうけて我等に平安を与え給ひし主エスを新らしく教へられ忘るべからざるものを与へられました。病児は主に守られ薄紙を剝ぐ如く快方に向

い全く癒され成長致し、只今齡三十歳を過ぎ信仰を身につけて活社会に働かせて頂いて居ります。ソノウタレシキヅにて癒されたことを確信もて已が使命に前進しつつあります。末永母君のおことは『この御子様は神様があなたにサムエルとしてお与えになるべく祈りました』と仰せられましたのを思い出します。

この御母君が地上の御生涯誠に輝かしい聖徒のお姿であったことは申す迄もないので、接するすべての人々を神の愛でおつつみになつたのです。御母君様こそは永遠の生命の甘美を味いなされ、主と共にあることが何よりのお喜悅であり、神の栄光に満たされておいでになつたと存じます。地上でお祈り下さつたとともに、彼方の岸にてもつゞいて祈って頂いて居ることを信じて、またあう日を楽しみつゝ励ませて頂き度存じます。日々の信仰の不徹底を省みまして、みこころにそむく生活を誠に申し訳のないことと存じます。故人様の香ばしさを偲ぶ毎に心を新にせられ、神の御憐れみとゆるしを信じ感謝あふるるものでございます。御母君様が御病氣に罹らせられました頃、私の長男が社用で福岡に出張致しました時、母に与えてくれと仰せられて詩一二八をお示し頂きました。よい

御ことづてのおみやげで何物にもまさる最後のよいお励ましを頂きました。この聖言を心の肉脾に刻みつけて、残る生涯を歩み度く神に祈りつつ馳場を走りましよう。

最後に腰折二首おたむけに

うつしよの別離の涙拭はれて、仰ぐみくに君ぞ輝く

うつしよにキリストのかをりはなちつつ

いみじき花は天に匂へる

封入の書簡は末永雪子様より最後に頂いたもので御座いますのでお目にかけます。
(景山満喜)

去る卅日おしたため頂きました御集会の御様子や尊き聖言かずかず、御ねんごろに真に有がたく拝見いたしました。尚聖言は繰返し拝読させて頂き、恵まれ度いと願って居ります。

私はお約束申上げながら失礼申し上げまして、幾重にも御詫び申し上げます。実は夏の暑い間特別の御憐みにより、障りなく無事に過させて頂きました御恵みになれてしまいました。老体の弱い身の事を忘れて九州修養会にもぜひ出度いと願ひ、又その上渋谷教会のバッククストン師の聖会にも、翌日曜礼拝にも青山学院の寄宿舎に一泊させて頂き、加藤家にも一夜泊めて貰ひ、お宅様にも伺い度いとその外様々計画を自分で立て、居りましたが、主のみゆるしがございませんでした。二十日頃から風邪気味にて咳が少し出ていましたが、とうとう床に十日ばかり休みました。ヤコブ書の聖言を頭だけは分つて真に自分のものとして居りませんでした事も教えられました。

御血潮の御恵みによりみゆるしを祈り、色々教えられました。その後は自分の願ひは一切おささげいたしました。たゞ主の御導きのままにと御願ひして居ります。只憐みによりましてもう殆ど快くなして頂きましたから、二三日前から起きて居ります。まだ出立つの日は定めて居りません。どうぞお祈り下さいませ。お願い申し上げます。実枝子に送って貰う事にいたして居ります。二人共弱い弱

い者でございますから特別にお祈りお願い申し上げます。

福岡の家に御滞在の時の事、いつもおほほえ頂きまして有難く存じます。よいお歌を嬉しく拝見いたしました。福岡の家族にも拝見いたさせ度いと存じて居ります。皆様にも厚くよろしくおつたえ願ひ上げます。

おくれながら御礼とお詫びまで、御一家様の御祝福心よりお祈り申し上げます。

かしこ

十月五日

末永雪

景山満き子様

実枝子よりもくれぐれもよろしく申し上げてと申し出て居ります。

(昭和三十年)

末永雪子姉から頂きましたハガキ、手紙などまだまだ御座いますが、此一通は最後に頂きましたもので御座います。バックストン師の集会に御出席なかったの

で、私から左の通りその集会の聖言を御送り致しましたので一寸申し上げて見ます。

ピリピ 一章 一―一九

エペソ 四章 一六

マルコ 一章 十二―一三

ペテロ 前五章 六―九

ピリピ 一章 一

ピリピ 二章 一―三

ピリピ 一章 十五

使徒行伝 十九章 一二

このうちの一部を御報告申し上げたように存じますが、ザッとこんなもので御座いました。

(景山満喜)

長尾奥様宛の手紙

四月一日御認め下さいましたおなつかしき御奥様の御玉章真に、有難く恐縮いたしつゝ繰り返し拝見いたしました。此方よりこそ長い間御無音に打過しまして、寒中も御地大雪の事度々伺い、その都度御案じ申し上げつゝも御見舞もさし上げませんで、真に申し訳なく御詫びの言葉も御座いません。

御便り頂きました前夜も翌朝も聖前にお祈りの時今度こそは御機嫌伺いおわびも申し上げ度くと願いながらも、思うにまかせぬまゝ過して居ります内に、返つて御奥様より御懇音賜りまして、お細々の御様子拝させて頂きました感謝に溢れて居ります。

御奥様も御風邪にて永らく御勝れ遊ばしませんでした御由なるも早やお健かに、一昨年お目にかゝりましたお可愛い御曾孫様がもうお姉様におなり遊ばされ、此度は御坊様を殊の外御安産でいらせられました御由、御一同様の御喜びの程も伺われまして、心よりお悦び申し上げます。

御入院中の不慮の御災難真に驚き入りました。赤様が何のお障りもなく天使の

御用を遊ばされし奇蹟の御業を承り主を崇めまつりました。同時に詩ノ百廿一ノ七・八の御約束を新しく思い起させて頂き、御恵を堅うして頂きました事で御座います。私も過る数日前八十才の誕生日を迎えまして、弱き身を只々神様の御憐みの故に今日迄支えられて参りました御恵を、子供等と共に感謝させて頂きました。殊に御奥様が小さき者の為常に聖前に御覚えて頂き、御祈り頂きます事厚く厚く御礼申し上げます。お祈りを頂いて居ります弘海も、三月に父の墓参りに帰省いたし一週間程滞在いたしましたでしたが、御恵の中に守られ本年は格別健康も強められました御用をさせて頂いて居ります。私も主の御許しを頂けますれば、もう一度本年も上京御目もじ出来ませうと願って居ります。文子がクリスマス前より胃の工合悪く胃かいようと診断されまして、大した事も御座いませんが、食養生と安静を守り静養いたして居ります。宮内娘が昨冬より此方に参り、私と一緒に過して居ります。

何卒くれぐれも御身御大切に遊ばします様いよいよ御祝福を御祈り申し上げます。

末筆恐れ入りますが、三谷御奥様に山々よろしく御伝え申し上げ願ひ上げます。
敏毅兩人宮内よりもよろしく申し出て居ります。

四月六日

末永 雪

長尾御奥様

御前に

(素夫誕生につき祖母上より頂く)

末永母上に、わたしが初めてお目にかかったのは、明治四十五年の秋のことであつた。今からちょうど五十年前のことである。二日市で靈会なるものが催されていたのであるが、人にすすめられて、気が進まぬながら出かけて行つた。集会の空気は、卒直に言つてわたしの好みには合わないものがあり、したがつてわた

しは、しばしば集會からエスケープして、ひとりで散歩に出かけたりすることが多かつた。

しかし、この集會の時にわたしに深く印象づけられたかたがあった。それは末永母上であつた。望月照子さんのご紹介で初めてごあいさつを申しあげ、きわめて言葉少なにおはなしを交わしたのであつたが、その時の末永母上の上品さ、しとやかさ、また敬虔な態度にいたく心うたれたものである。日本の婦人にもこういう立派なかたがあるのかと、そのお姿が、当時かなり生意氣な考えかたに傾きがちであつたわたしの心にも深く印されたのであつた。

ところがその翌年の春、このかたをわたしのお母アさまとお呼び申し上げるめぐまれたえにしとなろうとは、全く不思議な神の導きであつたと言ふ外はない。その夏にわたしは渡米遊學することとなり、その途次、福岡のお宅に立ち寄り、このたびは、もう少しゆっくりとおはなしができたのであつたが、お知り申しあげれば申しあげるほど、母上の深い信仰と慈愛とに感動させられ、特にその祈り深いご生活に心から頭の下がる思いをしたのであつた。

わたしの滞米期間は、予定よりはるかに長びいた上、わたしが聖書や神学の批評的研究を主とする大学に学んだりしていたので、純福音に生きる末永ご両親は、ずいぶん心配しておられたことであろうし、また事実、めぐみ派の人々の中には、ご両親に対してわたしを中傷し、離間しようとしたものもあったようであるのに、それにもかかわらず、あくまでもこのわたしを信頼しとおしてくださり、幸いな親子の關係を全うしてくださったことについては、わたしはただ感謝と感激の外はない。母上には、形式的な信仰の型以上の、あるいはそれ以外の、さらには、より深いところに宿る生きた、真実のたましいのみが与え得る知性と愛とがあったのだ、とわたしは解している。表面的な、型にはまった信仰様式は、しばしば人と人とを離間し、離反させる。しかし、真実の理解ある生きた信仰は、たましいとたましいとを結び合わせる。末永母上は、純福音の信仰と共に、真の信仰の与える靈的知性と愛の生み出す理解力とをそなえておられたと信じる。さればこそ、時には異端呼ばわりされたわたしをも、信じ愛しとおしてくださったのだと思ふ。

事実、母上には老齡に達するまで、絶えず学ぼうとする好學心を持ち続けておられた。よい意味の好奇心の旺盛であられたことに、わたしはしばしば驚かされていた。したがって、母上は熱心な読書家であられた。聖書はもちろん、母上の最大の愛読書であり、朝となく昼となく夜となく、いつも聖書に読みふけておられたが、そのほかにも、信仰書や宗教雜誌などにも注意しておられ、若い人たちに却っていろいろ教え示されることが、しばしばであった。

わたしは、母上は本質的には理性の人であったと思っている。物事を冷静に判断し、組織的に整理し行く性格をお持ちになっておられたように思う。身だしなみなどにおいて、いつもキチンとしておられたのも、こうしたご性格のあらわれであったと信じる。境涯次第では、立派な学者にもなれたかたではなかったかとも考えられる。こうした性格と素質の母上が、信仰によつて深い敬虔な祈りの生活へと導かれたのであった。だから、いわゆる純福音の集會に出られても、多くの熱信者がするようになり、徒らに感情に走つておしいわい泣き呼んだり、大声でわめいたりなどは、決してなさらなかつた。ただ、静かに、つつましく祈っておられ

たのである。「祈りの母」、わたしは末永母上の祈るお姿において、その理想像を仰ぎ見る思いがする。

原爆によつて時子を失つたことは、母上に取つて、実に大きな傷手であり悲しみであつた。しかしそのために、取りみだした様子などみじんもお見せにならなかつた。ただひたすらに神を見あげ、神に万事をゆだね奉つた、静まりかえつた、というか、あるいは堂々ともいえる態度で終始された。わたしの方が却つて慰めていただいていた次第である。

実枝子との縁についても、母上が熱意をもつて祈りの中に考えてくださつていたと聞く。ご自分に取つて大事な可愛い末っ娘を、すべての点においてそれらふさわしくないわたしに、とお考えになつたのは、いったいどういふわけであつたらうか。一番明白なこと、そしてまたしても感激に堪えないことは、このわたし如き者を、なおも信じ愛してくださつた、ということである。世の常識を突破してもこの縁の成立を祈られたのには、全く信仰と愛とのみの授ける勇氣と新鮮な感覚とがあつたことを示す。当時すでに八十になんなんとしておられた末

永母上には、実に新しいモダンなとも言える大胆さ、型破りを敢えてする敢為の精神があったとしか思われない。

幸いに、おかげでわたしたちは幸福な家庭生活を続けてきている。このつつましい家庭に、母上は度々おいでくださった。しかも、長期にわたってご滞在くださった。広島効外井の口におけるわたしたちの住居には、ほとんど一年間も起居を共にしてくたさった。特に夏の夜な夜な、海べに臨んだ庭の芝生に椅子を持ち出してすわりながら、美しい音楽のような波音に耳傾け、涼しい夜風に吹かれつつ、静かに語り合い、祈り合った楽しさを今なお忘れることはできない。ああ懐かしい思い出よ！ また辻堂の家にも、ほとんど毎年数か月間ずつ滞在してくださり、最後にはご永眠の前年一カ年あまりも、わたしたちと共に過ごしてくださいましたのであるが、それはわたしたちに取ってなんとめぐまれた年月であったことか。また母上の存在がどんなにか、わたしたちの家庭の祝福となり支柱となっていたことか。末永母上は、生みの子たち同様に、この拙ないわたしをも子として愛していてくださったので、わたしもみんなと同じように、「わたしのお母アさ

ん」とお呼び申しあげ、心から懐かしんで止まないものである。いつだったかご自分の着物を、ながいことかかってみずからのお手で縫いなおして、わたしにくださったことがある。もったいない次第である。これは母上の愛のかたみとして、大切に用いさせていただきたいと願っている。

欲を言えば、この静岡の家にも、母上をお迎え申しあげることができたらと思う。しかしそれは、もはやかなえられることではない。いや、母上はかえって、今や苦しきも嘆きも涙もない天つみ国に、神のみもとにあつて永遠のやすらいをめぐまれておいでなのだ。わたしたちもやがて、その天つみ国のみもとに加えていただく日を待とう。その日もそう遠くはない。その日まで、地上の生活が許される間、母上の残してくださった信仰と愛との尊いお手本に則つた生き方をするよう、互に努力して行こう。これが後に残されたわたしたちの願いであり、また誓いであらねばならない。

(松本卓夫)

私に限らぬことと思うが、肉身の像というものは、どうしてもそれが肉身であるという理由によって、一般の人びとに対するものとは描かれ方が違ってくるのだ。祖母が世を去るまで、ついに私は慈しみ深い祖母とその孫という家族関係の枠内においてしか、祖母の像を見つめていかなかったような気がする。孫にとつて、それは正しく申し分のない祖母であったが、その慈愛の中にのみいたずらに溺れて、祖母のもつ求道者としての一面、いや一人の女性が明治以降三代の時代をひたすら生き抜いてきた足跡という、もつとも肝心なものを、なぜ真剣にとらえ、考えてみようとしなかったのか、われながら残念でたまらないのである。

旅立たれてしまつてのち、いや、だからこそといふべきかも知れぬが、私には、祖母を一人の人間として捉えるのに必要な距離がようやく許されはじめているのに気づくのである。

父が祖母のために七隈の本宅内にささやかな仮寓をしつらえてから、祖母はかれこれ五、六年もそこに住んだであろうか、時折り、私の足は無性にその一角に惹きつけられた。これといった動機は思い出せぬが、やはり心のどこかに寂しさ

とか、悶えとか、疑惑とかの陰が萌したときに、とくに足が向ったように思う。そして、いまでもまさまさと心に刻まれているのは、第一にいつに変わらぬ祖母の微笑と静けさ、第二に粗衣をきちんとまとったその身づくろいの正しさと清潔な室内、第三に、かならずどこかのページが開かれていた聖書である。

その微笑を、私は祖母の孫に対するそれとのみ看過していた。いまにして確信できることは、その微笑は、実は孫に対するもののみでなく、隣人、いや人間全般に開かれていたものなのだ。祖母の周辺には、よく静かな小人数のグループが訪れていた。静かな会話がいつまでも続き、その間中、それらの人々に注がれる祖母の微笑は変わらなかつた。

祖母はいつも何かしら仕事をしていた。私は祖母が寝そべったり、ぼんやり放心しているような姿をついぞ見かけた記憶がない。手足を動かしていないときは端坐して聖書に向うか、祈っていた。若い私には、あまりに破綻のない祖母のそんな風情がいくらか気づまりですらあった。いくらかの稚氣と、多分のレジスタンスをこめて、ある日、私は祖母に聖書のいくつかの章節についてこと細かに質

問じたことがあった。新約、旧約を通じて、私が用意した質問はもの静かな祖母の返答の前に、たちまちその意図のみっともなさを感じねばならなかった。祖母は恐らく聖書のすべてを暗記するまでに、消化していたのではなからうかと思う。しかし、そんなことは全く表情に現わさず、いつも洗礼を受けたばかりのような、キリスト教に対する敬虔な初心を失わずに終わった。肉身である絆を離れて、私は信仰の美しさを思わずにはいられない。

祖母はよく祈っていた。生活のすべてが祈りに帰結していた。私の若さは、ある時期、むしろ痛烈にその姿に反発を覚えた。今日のこの社会の中の矛盾、不幸がただ祈ることのみで解決されるはずはなく、積極的な実践と行動を伴うことなくして果たされるはずはないと思っていた。この命題は正直のところ私の内面で、未だに相剋を重ねている。しかし、祖母の祈りは、私が考えたような、ある結果の実現を期待する類のようなものではなかったのだと思ひ当る。祖母は恐らく祈ることしかできぬ人間の貧しさと、祈ることによってのみ到達できる人間の偉大さを肝に銘じて知っていたのではなからうか。祖母の祈りほど、いわゆる新興

宗教の祈りから遠いものはなかつたのではないかと思う。

祖母は絶えず人のために祈った。自分を離れて人のために祈る姿が、祖母のもとに悩みをかかえて駆けこんだ多くの人々の心に通じ、人々の心を救ったのではなからうか。考えてみれば、心が救われたとき、悩みや迷いを生じた環境や条件の半ばは、克服できたも同然なものかも知れない。私の若さは、眼に映ずる社会の条件にのみ性急にいらだち、それに連なる人間の心の微妙さに気づかずいたのだ。私は卒直に祖母に詫言ねばならない。祈って何になるのだ。と心の中で不遜にも咳いた私は間違っていました。全く私心を去った祈りをもつ心境は、いかに物質文明が咲きほこつても、人類の無類の財宝である資格を失うことはありますまい。

私心を去るといふ事が、いよいよ困難になってきた今日、そして、それ故にこそ、幾多の複雑な社会問題が渦巻き、不幸という名で呼ばれる条件がその傷口を拡げようとしているとき、ひたすら祈りつづけていた祖母の平明な表情が強烈に、脳裏に蘇ってくるのである。

(末永直行)

私がまた青年の頃でしたが、神様の話を母からよく聞かされたものでした。私
は他の事に心うばわれ、かえって迷惑に思つて居りました。

母が或時風邪をひかれ、「神様信じます。感謝いたします。もういやされまし
た。」とおっしゃりながら、コンコンたぐつて居られるので、此の時とばかり私
は「おかしいではないですか。なおりましたとおっしゃりながら、たぐつて居られ
るのではないですか。」と申しますと、母は笑顔で、「え、ですが根本はいやさ
れたのです」と。

私は年を重ね、此の頃になって、母が如何に信仰に徹して居られたか、又神様
に対する思いがどんなに深いところにあつたか、今にして少しづゝわかるように
思います。又私が、記憶にある限り、母の生前に色々心配をかけたり、つきぬ問
題はあつたにかゝらず、一度も激した声や態度を、見聞きした事はありません
でした。

又猪城の叔母、母、高田の叔母三人姉妹の仲のよい事には、心暖まる思いで今
日までまいりました。

(佐伯憲治)

あの弱いお母様が十人の子供を与えられ、お若い時から殆ど病床の方でしたのに、八十二才の寿命を全うし神と人とに愛せられて天にお帰りになりました時、私は悲しいと云うよりほんとうに感謝で一杯でした。お母様程幸なおばあ様があるかしらと思える程兄妹姉上様に御ねんごろにしていたいただき、私共心から感謝いたしております。お召されになる七年前に京都でお悪い時がございましたね、あれ以来全く強められ福岡から東京まで何回も旅行なさいましたでしょう。いつもその時京都にも寄って下さり、共に主を崇め讚美した事でございます。「あの困った問題も祈りに答えて下さった。神様この事もよくして下さいます。」といつもいつも望にかがやき主をほめたゝえ、喜にあふれていらっしやいました。あの嬉しそうなお顔が浮んで参ります。お母様の前にはどんな問題も問題ではなく、必ず神様はよくして下さいますと望と喜をもって主をほめたゝえて喜び、聖詞、特に晩年は詩扁の中に「この様な聖詞もあります。」と喜びにあふれていらしたあのお姿、忘れる事が出来ません。「私は近頃目が悪いので大きな活字の詩扁だけが読めます。毎日この詩扁を読むのが楽しくて楽しくてなりません。」ととても

嬉しそうなお顔をしてお話していらっしやいました。明けても暮れても主を喜び聖詞を楽しんで、地上で毎日聖國を味いつゝ天のわが家えお帰りになったという感じがいたします。「神は世のおろかなる者、なきが如き者を選び給えり。」との聖詞はお母様にほんとはまる様な気がいたします。エス様が弱いお母様の健康となり、智慧となり、宝となり、愛となり、一切となつて下さいました。お母様もよくおっしゃいました。「私は無いものづくし、何もありませんが、何かあればそれはエス様です。」と。

只今短い時、静まる為に二階に上つて来ました。詩扁百十九扁を読んでいますと、このみことばもあの聖詞も母が喜んで味いましたところであると、私も嬉しくて赤鉛筆でしるしをしていますと、殆ど半分位赤線が引かれてしまひそうです。

詩扁百十九扁の六十二、六十四、六十九の下半、七十の下半、七十二、七十三、九十二、九十四、九十七、百三、百十、百二十七、百卅一、百四十三、百四十四節……………

こうしてしるしをしていきますと、母がどんなにみことばを味い楽しんでましたのでしょかと思われます。毎日毎日来る日も来る日もみことばを新しく靈の糧としていたゞき、喜んでいましたのでしょかとしみじみ思われて参ります。詩扁百三扁。百廿七扁の様にもみことばの味を何にたとえてよいかわからない程喜び楽しんでいました、あの姿が思い起されます。

母にとって子供や自分の弱い事も、おろかな事も、様々の問題も問題ではなかつた様です。母は弱くおろかでした（いつも自分でそう申して居ました。）から、たゞ神様だけにおすがり致しました。神様はお約束通り母の全部となつて下さいまして、凡てに豊かな豊かな天の恵をもつて取り囲み、御愛のふところに入れて、あの最後の死の苦にも勝たせて下さいました事を心から感謝いたしております。常に喜ぶべし、絶えず祈るべし、凡ての事感謝すべし。

力は神にあり。エホバを喜ぶは汝らの力なるぞかし。

平安をして汝らの心をつかさどらすべし。

日頃母の好きなきことばを思い起します。最後の病床にあって私に語ってくれ

ましたみことばは、「人は凡て神より与えられずば何物をも受くると思う事勿れ
」でした。

これから私も一生懸命聖詞を学び母の味いましたみことばの滋味（詩百十九篇
百三節）を残る生涯に於いて少しでも深く味いたいと祈っております。

（佐伯潔子）

若い頃の母は至って病弱でしたが、五十半ばを過ぎてからは、次第に丈夫に成
り、その後二回ほど癌の疑いありとの診断を受けましたが、検査の結果、異常が
ない事が判ると、それからは健康に自信をもつ様に成ったのか、晩年はますます
元気に成りました。

早朝から聖書を読む事と、祈りとは母の日課であり、教会の集りも欠かした事
はありませんでした。又病人は誰彼の区別なく、二度も三度も見舞に行き、悩み
事を持ち込まれると、解決するまでは祈り読けるのが常でした。

母は三十一年の夏も、例年の通り、鶴沼で実枝子と一緒に一夏を過し、帰途佐伯、竹田などをたずねて、十月上旬帰宅したので、その頃から、初めは旅の疲れ位に思っていたのが、何となく衰えが目につく様になり、受診の結果初めて胃癌と判ったのです。床に就く様になってからは、東京、京都、神戸と、離れ離れになっていた五人の娘達が、交る交る馳せ参じて看護に当たってくれましたので、家の中はまるで四十年前の母と娘の再現の様に、いかにも楽しそうに母は満足しきっていました。斯うした中で、病状は次第に進んで行つたのですが、不思議に母は何等の苦痛も感ぜぬらしく、最後まで病気の事など全く気にとめていない様子でした。かねがね自分は到底苦しい病気には耐えかねるから、安らかに天国に行ける様に祈っておると申していましたが、全くその祈りの通りになつたわけ、この事は私共遺族にとっての、何よりの慰めであります。今も母は、八人の子供等と、多くの孫達のために祈りつゞけている事でしょう。

(末永敏毅)

母上が昇天なさいましてから早や五ケ年、ともすれば御旅行中の様にさえ思われます程に別離の悲しさよりも、余りに麗しかった最後の凱施の御様子を思いましては、天国が一入慕わしくなつて参ります。

あの澄み切つた主に在つて喜びに満されていらした明け暮れ、聖詞によつて喜びにあふれていらしたあのお顔を忘れる事は出来ません。絶えず聖詞を胸に腰に指にとよろいの様にまとい、主の中にかくれ信じ望み感謝して過していらした母上の御一生は、かくれた聖徒の面影であつたと存じます。

あちらこちらからお祈りを願ふ手紙は絶えませんでした。どんな問題でも一度おたのみを受けたら最後きかれるまで祈りつゞけて下さる眞実な母上でした。お口は只讚美とみことばに満ち、人の徳を汚す様な事は曾て伺つた事がございませんでした。

最後の一二時間位前に「身体をきれいに拭いて下着も着替えさせて下さい。」と主のみ前にいらっしゃる用意をちゃんとなさつてから、「只血潮を崇めて讚美して下さい。」と申され、枕辺の私共は御宝血の讚美を繰り返して、主をたゞえ

つゝ御別れしましたのでございます。

子供達や孫達に対する母上の只一つの願いは、神を畏れる一事でございました。又神様から与えられたすべての物を大切になさり、時間も同じく無駄なく大切に用いられ、思いも意志も主に献げて只主御自身のみを求めてやまない、実に神を畏れていらした日常生活の一つ一つにたゞ頭が下がるばかりでございました。たしかに力と愛とつしみの靈に満されていらしたお方でした。日夜やわらかなそして暖かい愛の中に共に過さして頂きました三十数年の私の感謝は、とても筆では書き現わせません。感激でございます。

具体的の一つ一つは到底かぎりはございません、母上の思い出を語ります時は、まるで別人の様だと云われる程つきないのでございまして、もっともっと大声でお証しいたし度い位でございます。医師も看護婦さんもあまりの平安さに驚いていらっしやいました。その御昇天後のお顔のうるわしさ、全く十七・八の花嫁の様な純な潔いお姿でした。

昭和三十一年六月十一日、まことにきよめられた無垢なキリストの花嫁として

天国に移され給いました母上に、地上での断ち切れないお別れをいたしましたの
でございました。

実の娘同様にそれにもまして愛して頂いた母上に、病弱な私は純一な誠を以て
お応えする事の一つだになす事なく、終始御愛をお受けいたすのみであった事を
心苦しく思いますと共に、いつまでもつきぬ感謝で一杯でございます。

あれから五年という月日が流れてしまいました。日に日に主の聖前で御目にか
かる日が近づいて居ります。只御足の跡にならう者となり度い一念のみでござい
ます。

お母様のおいのりが、色々の意味で形造られつゝございます事をよろこび下
さいませ。

(末永文子)

母方の祖父は黒田藩に属し、柔道の師範であった。明道館有段者名札の高位に、
今でも残っている筈である。儒教を遵奉し温厚な高砂の翁を思わせるような、白

いあごひげを長く垂らした人であった。子女を戒める場合には、ただ一人を部屋に呼んで、諄々と訓諭するといった風で、母はそのような家庭に円満に育った人であったが、父は平戸藩に属した女代官といわれた末永家本家の女丈夫型伯母の感化を多分に受け、あらゆる艱難を克復し、之を乗超えていく剛毅な気性を備えていた。母は保守的であり、父は積極的であった。一方母は公正を守るに根強いものがあつたが、父は強固な意志を有しながら、人情にもろい点があつた。そのような性格の相違から、父母の意見の衝突を見ることがあつたが、それにもかかわらず父は母を尊敬していたし、母も父を尊敬していた。入信後も性格的に父は福音的であり、母は律法的であつた。そして性格の相違からきた信仰の衝突の為に雙方苦しんだようであつたが、晩年母はパリサイ的な己が義に立って、人を批判し自らも苦しんでいたことを示され、宝血の功にすぎる信仰に導かれ、キリストの愛による寛容を与ええられ、自らの不柔和と、物事にこだわるところから融通のきかない窮屈な性格的欠点を自覚し、そこから解放され聖別されるよう折り求めて行つた。父は母の変化を非常に喜び、晩年は父母の間に、性格的相違を有

しながらも信仰による融和を見るようになった。

父は社交的であり、母は無愛想で子供達にも何となく物足りなさを感じることもあったが、晩年母は此点も深く反省して、内にある善い感情を外にあらわすように努力していた。

母は祈りの人であり、読書家で、靈的に相当難解の書をも読みこなしていた。聖書によく通じていたし、聖靈による確信に導かれたときは、父に対しても子供達に対しても權威を以って言をし、適確な導きをした。

父は頑固なようで、単純で無邪気な人で、一面失敗も多かったが、母は堅実であっただけ、一面片意地と思われるようなところがあり、素直に父に同調し難かったようで、その点父に対して申訳なかったと父の死後屢、母は悔いていた。

そのような自分の欠点弱点を認めては、血潮を仰ぎ、聖靈の柔和と謙遜と寛容を求めつつ進んでいったことが、母の書残した多くの日記の中に見られる次第で、かくして母の靈性は驚くように成長し進歩し円熟して行ったのであった。

母は私にとり肉体の産みの親であり育ての親であったが、同時に母は私の魂の

産みの親であり育ての親でもあった。

私はかかる母を与えられたことに對し心からの感謝を捧げ、またこれを誇りともしているのである。

「神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。」（ヘブ一三の七）

（末永弘海）

二十五年前、あなたと同じ立場であった私を思い出します。お式の前日まで安で胸一杯の私でした。オルガンも弾けない聖書の知識もない、心配のあまり私が一番上の姉に頼んで、牧師夫人になるための心得と注意をこまかく書きしるしてもらう事にしました。

一晚中姉は祈って考えて、翌朝そのノートを私に渡してくれました。十人の中

で一番文才があり書く事がお得意でしたから、牧師夫人はこうあるべきだ、あるべきだとノート一杯名文が書きつらねてある事を期待しつつ開きました。そのとたん、私は驚きました。部厚いノートの中に記されたのはたった一行で、一、蔭の祈り、二、蔭の祈り、三、蔭の祈り、それだけでした。姉は広島原爆で亡くなりましたが、このはなむけの言葉は今日も私の原動力となって居ります。その後、姉の記念会でこのあかしをした時、当時八十二才であった母は私に申しました。「お母さんはその言葉にもう一言つけ加えたいんですよ。それは一、十字架、二、十字架、三、十字架です」と。母の生涯は血潮の中にひたって、血潮血潮とあがめておられた。それ以来、私のノートにも一行つけ加えられました。そしてその翌年母も召されました。今日も私は欠けだらけ、失敗だらけの御奉仕の中で問題やたたかいは絶えません。十字架の下にひれふして祈るだけがすべての問題を解決する道である事を経験してまいりました。伝道者の妻として未だに何一つ御用の出来ない自分をながめては、なさけなくりますが、その度毎に、「働きの出来る奥さんは多い。しかし、真に祈りの奥さんは少ない。あなたはこの道を選

びなさい。」とはげましてくれただ姉の言葉を思い起します。

契一が出航の時の手紙

契ちゃん、いよいよ出航の日が来ましたね。「水をくみし僕はしれり」(ヨハネによる福音書第二章九節)

こゝに至るまでの困難と苦しい道程を思えば思う程、感慨無量です。あなたが関学高等部へ入学した時からこの事のため祈り続けて来ましたが、一向に道は開けませんでした。いよいよ卒業を間近にひかえながら、することなすことすべてが行き違い手違いばかりで、一時は大切なあなたの方針をととうあやまってしまったのではないかとさえ思いました。見ゆる所はなんにもなく、まったく無から有を造り出して頂かねばならぬが私共の立場でした。やっとアズベリー大学の入学許可証だけは送って来たものの、経済的裏づけは何一つありません。渡航費の問題、スポンサーの問題、四年間の学費の問題等と次から次に難関がひかえていました。私自身ともすればあせりの色が出てくるところに、母の顔さえ見れば

「僕一体どうしたらいいの」とため息をつくあなたでした。「とにかく契ちゃん、思い煩う時間があったら一緒に祈りましょう。」とお台所でお茶碗を洗いながら、ある時は菜っぱをきざみながら心を合わせて祈りましたね。「見ゆる所が順調にはこぶ時信じるのは信仰ではなくて、何も彼も思い通りにならない時詮方つきた時にこそ、信じるのが信仰ですね。」とあなたに語り聞かせた言葉は、実は私自身に言い聞かせていた言葉でした。祈りながらも信じながらも、今日まで幾度かゆきつまり、幾度か失望し、幾度か途方にくれてしまった母でした。けれども、約束して下さったお方は誠な方でした。

契ちゃん、一枚のカーテンがするすると開かれた時、向こうにはすべてのお膳立てが出来ていました。何から何までゆきとどいた、至れり尽せりのお膳立て、私共にはただ見えなかつただけです。これからのあなたの新しい道がけわしければけわしい程今の準備の時が必要だったのです。「さあ、元気でいていらっしやい。」あなたはすぐれた実力もなければ経済的な背景もない。強い体力もなければ有力なスポンサーもない、何から何までないものばかりでした。けれども、

あなたにただ一つあるものはエホバよりの助けです。地上のどの様な助けよりも強い大きな助けをもっているあなたは幸せな人です。

去年の五月、福岡の祖母上が危篤の知らせを受けた時、契一と祝子だけを残してすぐ様出発の用意をしました。当然留守居をする筈の契一が、「僕、修学旅行は止めてもいいから、その費用でおばあちゃんに会いにゆかせてほしい」と訴えた意外なあなたの言葉を聞いた時、母ははっと胸を打たれました。「この子はこれ程、祖母の祈りが身にしみていたのか。」とそれ以来あなたのポケットには、いつもいつも小さなグリーンのしおりがかくされておりましたね。これはおばあ様臨終の時、あなたへ送られたかたみの聖句がしるされておりました。「われはわれを強くし給うキリストに依りすべての事をなし得るなり。」

もうよれよれになったあのしおりを、今日もあなたはポケットに入れて遠い船出をしようとしています。グリーンのリボンはどうなによごれても、その中のみことばは決して古びないでしょう。そしていつまでもあなたのの中に生きて働いてくれるでしょう。これからの困難な留學生活に於て、この聖言葉はいつもあなたの

原動力となることを信じています。

(竹田照子)

天にいますわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。

(マタイ十二ノ五十)

結婚して間もない或る日、叔母様にお目にかかりました。長年の習慣で「末永の奥様」と申し上げました処、「Eさん、末永の奥様はおかしいですね、これからは叔母と呼んで下さい。」とにこやかに言われました。此の時から私の心の中に距離を置いて感じて居た末永の奥様が、身近な姦愛に満ちた親しみ深い叔母様となりました。

鳥飼にお住いの頃、七隈で離れにお住いの頃、と度々お訪ね致しました。その都度わが子を迎える母親の様に暖かく迎えて下さいました。私も母の家に帰った

様な寛ぎを覚え、主の尊い御用に当らせて頂く恵みの数々を感謝し、時の経つのを忘れる事が度々ございました。機にふれ聖書を開いて、御自分のめぐまれた聖詞の証詞を以って若い伝道者で、兎角消極的に成り勝ちな私を励まして下さいました。「土曜日には特に福岡、神戸、姫路、八幡の日曜礼拝の御用が祝され、めぐまれます様に祈って居ります」と篤い祈を以って支えて下さいました。叔母様が昇天なさって、此の祈りの支えがどんなに大きな力であったかを痛切に感じて居ります。

汝の能力は汝が日々に要むるところにしたがわん (申卅三ノ廿五)

福岡伝道館の頃、毎朝五時半から早天祈禱会が開かれて居りました。数名の方々が集会前に席に着いて禱告して居られました。叔母様もその中の一人で、雨の日も風の日も、みどり児が乳を慕う様に、主の臨在を慕い求めて各集会に励んで居られました。自らの弱さを御存じで叔母様は日々に主にもとめ、その能力を与

えられていらっしやいました。私共毎朝五時には戸を開けて早天の準備を致しました。若い元気な者でも、どうかすると寝過す様な朝（博多湾を吹き渡って来る、冬の冷たい風の日も、音も無く降る春雨の日も）、あわてて戸を開けると、外で静かに祈りながら戸の開くのを待っていらした御姿、私は御氣の毒でもあり、恥かしくもあつて声も出なかつた事も度々ありました。主に対する眞実なその姿に励まされました。

朝早く浜ノ町のお庭で禱告の時を持ちました。今朝は私が一番早かつたと喜んでいつもの祈りの場所へ行くと、末だ暗いのに誰か祈って居られる、声で叔母様だとわかりました。あの弱々しい叔母様が主の御愛に押し出され、主の愛を以つて多くの魂の救いの完成のために渴きを以つて主に祈り求めて居らつしやつた姿を思い浮べて、今も事毎に励まされて居ります。

わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、
走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。(テモテ第二 四ノ六七)

病床に就いて居らっしゃる事を伺って、取り急ぎ参りましてお目にかかりました時は、癌と云う恐ろしい病気で休んでいらっしゃるとは思われぬ御元氣の様に御見受け致しました。「お祈り致しましょう。」と申上げますと、「Eさん、どうか安らかに聖國へ召して頂きます様にお祈り下さい。先年子宮癌の時は主が癒して下さると信仰が持てましたが、今度は祈ると召されるのが聖旨の様に思われます。」と日常の生活の中の一コマを話す様に淡々とお話しになりました。誰れでも、此の地上での生涯の終りを考える時感情的に深刻に成るものでございますが、信仰の善き戦いを戦い、走るべき道程を尽した人だけが与えられる主の平安のうちに天国を喜びを以って望んで居られました。聖靈の御導きを信じて祈りました。

地上での親しいお交りの時を何日まで与えて頂けますかわかりません。それで長年靈肉の御世話を頂いた私共の感謝の氣持で、出来る限り度々病床に御訪ねさせて頂きました。

神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思い

わずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。(ペテロ第一 五ノ七)

或る時は胃の辺りに手を置いて「ここに小さなしこりがありますが、押さえ
ても痛みもありません。」とお仰言つて別に「何だろうか？どうしたのだろうか
？……………」等」の不安を少しもお持ちに成りませんでした。すべてを愛する主
に委ねて居らっしゃいました。後日お訪ねした時「小さなしこりが初めは指の頭
位でしたが、今は卵程の大きさになりました。」とにこやかに語っていらっしや
いました。

家内の母が病床に御見舞した時の事でした。「彼方此方と多勢の御子様が離れ
ていらっしやると、何かと御心づかいが多いことでしょう。」と母がお尋ねする
と「はい、多勢居りますと色々と事がございますが、皆なそれぞれエス様にお頼
りして居りますので、私は安心して居ります。」との御返事でした。

真のさいわいは事情や境遇や状態でなく、生ける主に信頼する事である事を教

えられました。

(榎本利三郎)

なんぢらエホバの恩恵ふかきを味いしれ、エホバによりたのむ者は

さいはひなり。

(詩三十四〇八)

叔母様がお召されになつて早や八年の月日が経ちました。「エホバに依頼む者は幸なり」と、どんな時にも一すじに主を愛し、一切を主におまかせなされた叔母様の御生涯は、私共の胸深くきざまれて居ります。その祈りによって主の御愛を知らせて頂きました。

私が福岡に参りましたのは、叔父様が私と弟を福岡へ呼んで「生けるまことの神様を知らせてくれ」とおっしゃった遺言で、熱心な真宗の家からクリスチャンホームの叔母様の家に参りました。田舎育ちの右も左も分からない私共を愛し、祈りを以ってねんごろに導いて下さいました。その祈りによって、主の御愛を悟

らせて頂き救いに与らせて頂きました。

娘時代を叔母様のもとで過させて頂きました私は、ほんとに幸でございました。娘の様に、霊の上にも祈りと聖言を以って導き、肉の上にも一つ一つ手を取る様に教えて頂きました。今折にふれ、事に当って、聖言をもって静かに祈り教えられた事が昨日の様に思い出されます。

又この世に効ふな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを辨へ知らんために心を更えて新にせよ。(ロマ十二ノ二)

女は恥を知り慎みて宜しきに合ふ衣にて巳を飾り、編みたる髪と金と真珠と価貴き衣とを飾とせず、善き業をもつて飾とせんことを

(テモテ前二ノ九一十)

外の飾でなく、内なる靈の成長を願って居られました。

日曜学校の御用をさせて頂いて居りました時、未熟な者のため、ねんごろに指導して頂き、会堂の隣の小さい部屋で御用の間中祈りつづけて下さいました。御用が済みますと大変喜んで一緒に感謝して下さいました。此の事によって、尊い主の御用のための陰の祈りがどんなに大切な事であるかを教えられ、今もあのお部屋で祈っていらした叔母様のかがやく様なお姿を思いおこし、はげまされて居ります。

汝をして人と異ならしむる者は誰ぞ、なんじの有てる物もに何か受けぬ物あるか。もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。

(コリント前四ノ七)

叔母様は主の御前に謙虚な生活をなさいました。此の聖言を常に口にしておか
らをいましめ、主に榮を帰し、感謝しておられました。

十人のお子さんをお育てになる時、昼間は仲々祈りの時が得られないので、朝早く聖書をもって西公園まで祈りに行っていらっしやうと伺いました。どんな時にも主に信頼して平安と悦びに満たされていらっしやうしたのは、この祈りがあつたからと深く思います。聖書を学び、主との交りの時が最上の喜びとしていらっしやいました。

集会をやむる或人の習慣の如くせず、互に勧め合ひ、かの日のいよ
いよ近づくを見て、ますます斯の如くすべし。(ヘブル十ノ二十五)

此の聖言をよくおっしゃっていただきました。教会の各集会に聖書袋を持たれた叔母様の姿は、子供が遠足にでも行く様に喜び勇んで、いそいそとして行かれた御姿が思い出されます。

(榎本百合子)

昭和四十年六月十日印刷
昭和四十年六月十一日発行

編集者

北九州市八幡区前田町一丁目

榎本利三郎

発行者

福岡市七隈逢坂一三〇〇

末永敏毅

印刷所

北九州プリント社

電話 〇三二六